㈳日本油空圧工業会発行：機関誌『油空圧』抜粋

愛写紀行 愛写紀行 愛写紀行 愛写紀行 愛写紀行 愛写紀行 愛写紀行 愛写紀行

写 紀 行

愛 写 紀 行

愛 写 紀

愛写紀行 愛写紀行 愛写紀行 愛写紀行 愛写紀行 愛写紀行 愛写紀行 愛写紀行

三 浦 吉 成

ずいひつ

趣味雑考

三浦吉成*

趣味とは，広辞苑によれば①感興をさそう状態，②美的な感覚のもち方・このみ，③専門家としてではなく楽しみとしてする事柄とあります。ここでは，おもに③について自分なりに感じていることを少し書いてみたいと思います。ここに，浅学非才をも顧みず貴重な誌面を費やすことをお許し願いたい。

さて，趣味についてですが，人それぞれいろんな趣味をもって，それぞれの余暇，生活，人生をエンジョイしています。世の中，いや身の回りにもいわゆる“玄人裸足”と言われるようなその道の専門家や趣味の域を超えた方も沢山居られますが，私の趣味はまさに広辞苑の③の域を出る物ではない。その点，前々号，前号の誌面で楽しく拝見させて頂いた倉賀野，中西両先輩諸氏の趣味はまさにその道の専門家の域に達しておられると思います。今，自分の五十有余念の人生を趣味の面で振り返ってみると年令，環境，友達あるいは時代背景によって色々変わってきている。やはりはじめに読書ありきで小学～中学時代はもっぱら読書だった。これはおやじや兄達の影響が大きい。つぎに工作(鉱石ラジオや船・飛行機などの模型作り，今ならさしずめプラモデル）高校時代になるとそれに映画観賞（チャンバラ・西部劇・戦争映画・ミュージカル），絵画鑑賞（泰西名画），音楽鑑賞（クラシック・デキシーランドジャズ・スイングジャズ・モダンジャズ・ポピュラーソングやポップスなど）が加わってきたように思う。音楽については，クラブ活動が放送部であった関係で興味を持ち，当時のラジオのＳ盤アワーやＬ盤アワーあるいはＦＥＮ（米軍極東）放送のトップ20などを夢中で聞いたことを覚えている。トップ20などはアメリカで毎週ヒットチャート上位20曲を放送するもので，ヒット曲は何週間も続けて放送される訳で，その中の自分の好きな曲が何週間かしてから日本でもヒットし，先のＳ盤アワーやＬ盤アワーで放送された時は何となく得意になったものである。また，当時音響関係ではＨｉ－Ｆｉ（高忠実度再生＝ハイフィディリティー）やＦＭ放送が始まり，そろそろブームになる頃でした。自分も家でいい音でレコードや放送を聴きたいと思い，装置は高く買えないので，友人と秋葉原で部品を買ってきて組立てたりしたものです。その頃はまだトランジスターやＩＣはなく，まだ真空管やミニチュア管やダイオードだったので配線図を見ればなんとか組立てられました。さらに学生～社会人になると囲碁・麻雀が加わり，スポーツではスキーである。また，そろそろ酒の味も覚え始めた頃でもあり，これは齢を経て益々美味しさの魅力に曳かれ今だに続いている。社会人になり，結婚してからは競馬・ゴルフ・写真・山歩きが新たに付加されたが，競馬は東京を離れて暫く遠ざかっている間にやらなくなった。競馬は血のスポーツと言われ記憶とデータのゲームであり，また，今から始めるとなると単に馬券を買えばよいと言うものではなく，各馬の血統・過去の成績や特徴など零からスタート仕直しですから大変です。でも現在，世界中のサラブレッドの血統を辿れば必ず三頭のいづれかに到達することなどを考えると実にロマンチックかつドラマティックなスポーツと言えます。現在続いている趣味の中でゴルフは仲間が必要であり，何時でも何処でもとはいかないため，今は好きでもなかなか出来ないし，ましてや上達は望むべくもないが，ゴルフ環境（安く・何時でも・仲間）に恵まれた，九州，大阪時代に熱中できたことは幸せであった。その点“酒”は趣味とは言えないが，仲間となら勿論であるが一人でも十分楽しめる。最近ではカラオケなるものがあり，無理遣り唄わされるが満更でもない。“酒”については「下戸ならぬこそ，をのこはよけれ」（吉田兼好），「極楽は酒屋の門にあり」（一休），あるいは「酒と女と歌を愛さ

*㈳日本油空圧工業会

写真1　岩道に咲くリンドウ

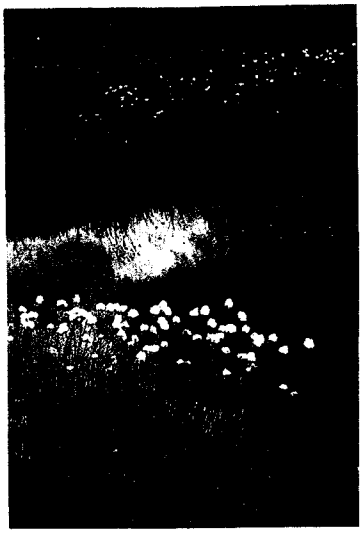


写真2　池塘に映えるワタスゲ

写真3　雷鳥親子の散歩

ぬものは一生の間バカのまま。しかもぼくらはバカではない（マルチン・ルター）」にあるようにいずれも共感を覚える先人達の名言（力強い大義名文）である。

話しは横にそれましたが，こうしてみると個人の趣味も時代・環境・経験あるいは仲間によって変わってきているように思われる。これは誰もが通り，経験する人生の一過程ではないだろうか。今の自分にとっての趣味は写真を撮ること，山野を歩くこと（山登りも含む）である。これは比較的何時でも，一人でも出来る趣味である。むしろ一人の方が気を使わなくて良い面もある。

カメラのファインダーを覗き自分なりに最善の構図，アングルや撮影条件が決まりシャッターを切る瞬間は全く雑念の入る余地のない，何もかも忘れ得る時間（とき）である。ただ，その瞬間に自分として考慮し，意図したあらゆる条件を総合した結果が一枚のネガとなるのである。それはまさに被写体との勝負である。しかし，プリントされた作品が意図した通りに出来る確立は2～3％程度と思う。また，逆に全く期待していなかったものが意外と良い時がたまにあり，そんな時は嬉しいものです。

その点何か陶芸（焼物）に似たところがある。山野を歩くことも写真を撮ることの一部である，単に目的（頂上）に達すれば良いと言うものではなく，その行程に被写体とすべき風景・草花・生き物等々を観ながら，撮りながら行くことがこの上ない楽しさなのである。でも，行程（登り）の苦しさにそれどころではなく何もかも投げ捨てたいと思うようなことも多いが，そんな時，道端に咲く可憐な山野草やハイマツの中から突然出てきたライチョウに出会ったり，木漏れ日に映える若葉を観たりあるいは足元の藪の中のウグイスの声を聞くと，いっとき疲れを忘れさせてくれる（写真1～3）。私はいつも次の言葉に心に，少しでもそれに近ずこうと歩いている。

「そこに在る物，そこで生きている生命に見とれる状態，そこから悦びを紡ぎ出すことにこそ巧みにならなければ，山歩きは陰気くさくなる（串田孫一／山の独奏曲）」

写真4　雲湧く尾根

写真は目的は，記録的な面が大部分を占めるが，感

動や，印象を自分なりに少しでも“一味違った”もの（趣味の部分）を撮りたいと思っているが，山での写真は我々の場合はプロと違って，何時間も，何日も狙ったチャンスを待ってシャッターを切ることは到底不可能である。したがって，行程途中の偶然に期待し，その偶然を逃さないよう神経を張り巡らしながら撮るのである（写真4，写真5，写真6）。そんな場合に意図した写真が撮れたときの嬉しさは格別である。一般的に写真に最適な時間帯は朝と夕であろう，これは山でも平地でも同じである。太陽光線が斜めから射す時の光と影及び逆光が造りだす変化が非常に美しく絵になるからである（写真7，写真8）。

シャッターチャンスと言えば，一生一度その瞬間しかないことがある。それは結婚式の写真である，とくに初婚の女性にとっては。私は会社の女性の結婚披露宴に何回か招かれたことがある。特にその女性とは深い関係はなかったが，写真を撮って貰いたいためにである。そんな時の撮影は趣味なんてものではありません。花嫁としては“ただ，写るだけじゃいやなんです”の気持でしょうが，撮る方は挨拶をしなくていい点はありがたいが御馳走をゆっくり味わう余裕（時間と気持）が全くない，宴の進行にしたがって，レンズを取っかえひっかえ，アングルを変え，親族・友人ムラなく（でもやはり花嫁が主であることは勿論ですが），また少しは折角の料理や酒もいただきながらチャンスを狙って撮らなければならない。映画やＴＶと違って撮り直しが出来ないのだ。責任重大である，写真が失敗したら何のために招待されたか分からないのだ。また，撮影が終わってもプリントが出来る迄１～２日がまた心配なのである ― ちゃんと綺麗に（それなりにしか写らないが）写っているだろうか，フラッシュはちゃんと効いただろうか，フィルムに傷やゴミが付かなかっただろうか ― などと，しかしそれだけに無事に写っていて，嬉しそうな顔をされるとホッとするとともに喜びを感ずる。その点自由気儘に撮る写真は気楽でいいが誰も誉めてもくれない。自己満足，自画自賛である趣味とはこんなもの，こ

写真5　山頂に立つ雲

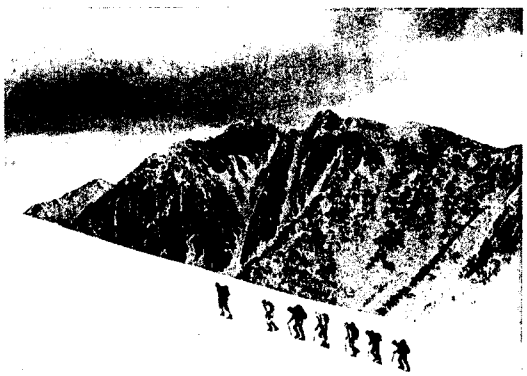


写真6　雪山を行く

写真7　山頂の輝き

写真8　新　緑

れでいいのだと思う。

趣味についていささか冗長になりましたが，これからも，恐らく続くであろう趣味は写真と山。ただし，後者は指数関数的に衰える体力と相談しながらとなるし，一人では許して貰えなくなりそうだ。パソコンについては，これからのマルチメディアの時代に対応して？また老化防止のためにも必需品となるであろう，と言うよりは私自身，今迄に撮った写真とネガが大分破棄したがまだ1万数千枚はあり，ある程度は前号で中西先輩が書かれていた様な写真の分類に近い形でアルバムにはしてありますが，これをＣＤ－ＲＯＭなどに収録し，見たい時に何時でも見られる様な形で整理したいと考えているが，またパソコン通信や園芸，料理などと一緒にサンデー毎日になってからの仕事に残しておこう。

ずいひつ　中高年者の南アルプス“北岳”山行記

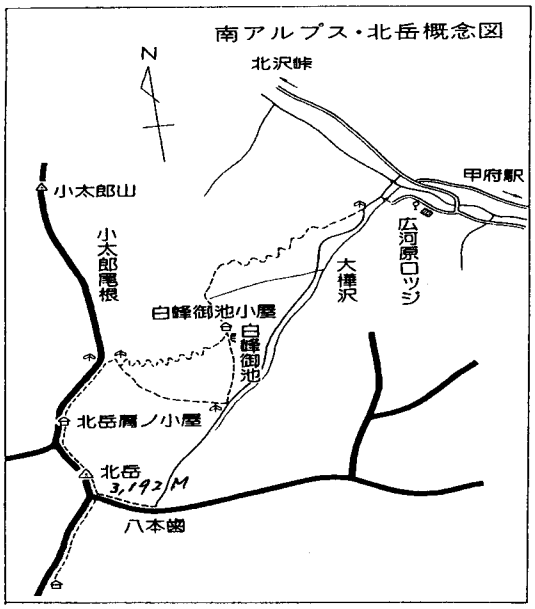
三　浦　吉　成*

この夏の山行は，当初８月初めに恒例の北アルプス縦走として，大雪渓～白馬～雪倉岳～朝日岳～蓮華温泉縦走（花と温泉の山行を－とくに雪倉岳の高山植物の写真撮影を－）予定していたが，南アルプスの盟主北岳行きとなった。と言うのは予定していた縦走ルート後半が水害のため不通となったこと，それに92歳になる母の入院や，大阪から孫が遊びに来るなどいろいろと重なって予定通り行けなくなり，この夏はなかば諦めていた。しかし，母の容態も快方に向い退院することができ，孫達も帰り，何とか２～３日の留守も可能となり女房の許しも得，急に思い立って行くことになった。行先については家の者から富士山にでも行ってきたらと言われ一時はその気になった。自分でも山に登る以上は一度は日本の最高峰に登ってみたいと思ってはいたが，日本一への挑戦は次の機会に残しておくことして，ナンバー２であり，南アルプスの盟主北岳へ登ることにした。南アルプスも北アルプス以上に高山植物が豊富なところでもあり，十分期待できると思った。

南アルプスは初めてであり，以前から本や雑誌で見て，行きたいとは思ってはいたが，ほかに行きたいところは沢山あり，色々迷ったが前日に決めて決行した。８月18日（金）～20日（日）の２泊３日の無理のないゆったりしたまさに中高年向きな“ビスターリ”なスケジュールで行くことにした。写真も一杯撮ってこようと…。

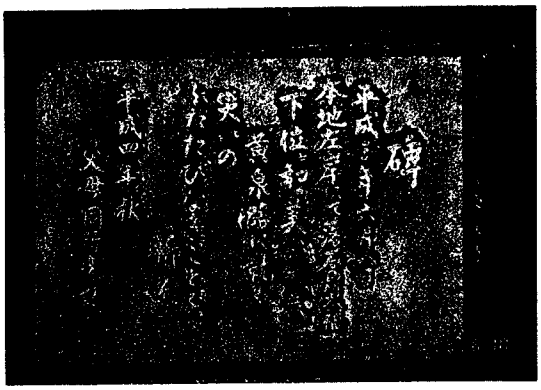
18日新宿７時発の“あずさ51号”に乗り（空席なしデッキに座る），甲府９時発のバスで広河原に向う。はじめて見る車窓からの景色を約２時間満喫しながらの快適なバス旅のあと，大樺沢出合で下車，正面にこれから登っていく大樺沢が北岳バットレスに向って伸びているのが見られ，吊橋を渡っていよいよ登山開始。大樺沢を白根御池小屋へ向う。小屋までは標高差600メートル，きょうの泊は白根御池小屋とする。登路天気は申し分のない快晴である。2000mを超えた山とは言えかなり強い日差しである。しかし，美しい沢を吹き抜ける涼風が汗ばんだ体に心地良い。沢を流れる水音も一層涼しさを与えてくれる。

登るにつれて背後に美しい山の峰が姿を現してきた。鳳凰三山の山並みだろうか。しかし見え隠



（「40歳からのとっておきの山旅」岳人編集部）

*㈳日本油空圧工業会



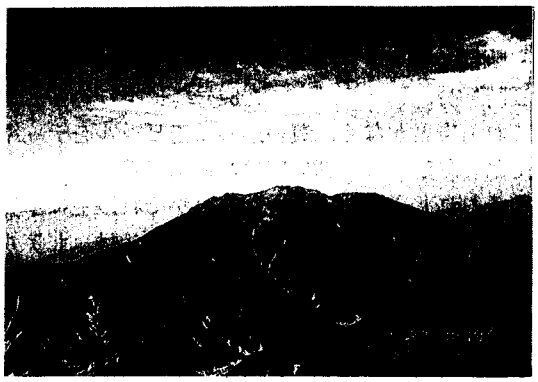
れする北岳は午後から多くなってきた雲に隠れてその頂上は見えない。南アルプスは北アに比べて随分植生限界が高いようだ。北アではとっくに岩場と思われるところでも低木帯，草原帯がなおも続いている。高山植物も豊富で目を楽しませてくれるし，疲れを癒してくれる。途中落石注意個所を何度か迂回した。これも自然破壊の影響か，山の地質の特性だろうか。不幸にも落石に遭い遭難された登山者の碑が注意を喚起してくれた。

16時白根御池小屋に到着し真っ先に缶ビールで喉を潤した。実に美味しい。これほど美味しいものはないといつもこの時は思う。17時半夕食のカレーをいただいた。正直言ってとても美味しいと言えるものではない。気圧の関係で米が旨く炊けないせいだろうか。下界ではまだ仕事の真っ最中だ。

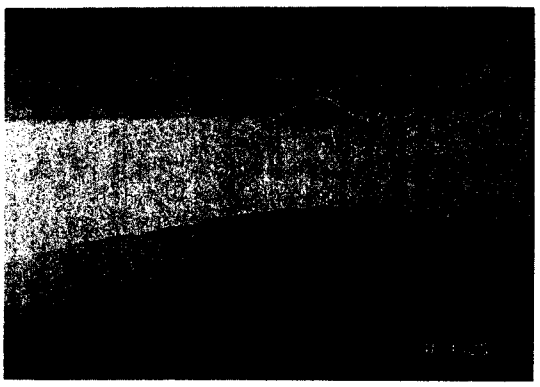
19時半就寝，20時消灯，小屋での寝る場所は布団一枚に二人とかなり混雑していた。まさに鰯の缶詰と言ったところだ。山小屋ではしょっちゅうあることで別に珍しくもないがやはり良い気はしない。途中下ってくる人は多かったが，登る人はそんなにいなかった筈だが他のルートからの登山者が多かったのだろう。登山者の構成を見ると，何処の山やハイキングでもそうだが，やはり中高年とくに女性が多いのが昨今の傾向のようだ。その他目につくのは夫婦連れ，家族連れと中高年のグループである。全般に若者は少ない。これも世相を表す一つの姿だろう。最近ではＮＨＫＴＶで“中高年のための登山学”なるものが放映されているぐらいだから。高齢化の時代健康で楽しく生活するためにも，山歩きできるくらいの気力，体力を維持するため日頃の心がけが大切であろう。ともかく喜ばしい現象である。しかし，いつでも行ける環境にある方は勝手ながら一般の人で混雑する土日，休日はなんとか避けてもらえないものかと思う。

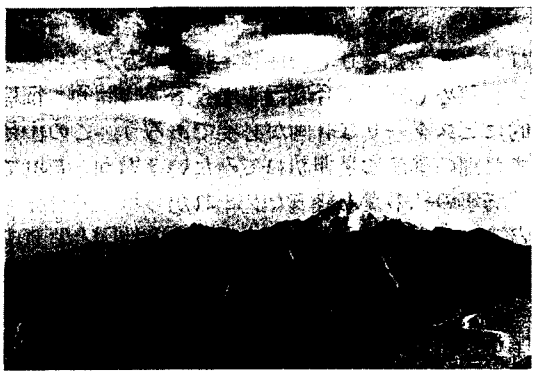
たまたま寝床で隣合わせた，千葉から車でひとりで来たと言う同年配の男性は，広河原の駐車場に愛犬をおいてきたとかでしきりに気にされていた。水と餌は用意してきたとか。この人は私と一緒で山小屋で２泊された筈，犬は用意された水と餌を旨く配分して食べるのだろうか，人ごとながら犬のことがいささか気になった。ビールと水割りで犬の無事を祈って乾杯した。それにしても，この小屋は水が豊富で美味しかった。

二日目４時起床，５時半朝食，きょうも快晴北岳が朝日に染まって美しい。小屋（2230メートル）から肩ノ小屋へ直登500メートル，急登につぐ急登である。でも，この急登の辛さを慰めてくれるのが，登路の両脇に繁る多くの木々の緑－ここではまだ新緑に近い緑－と高山植物の花々が慰めてくれる。ハクサンフウロ，ヨツバシオガマ，タカネグンナイフウロなど実にいろいろな花が咲いているが，いつものことながら何度見ても，聞いても名前を忘れてしまい思いだせない。また，名前の知らない花木が多い。名前を覚えると山行の楽しみがさらに倍加すると思われるが，これも年のせいかと諦めるしかない。せめて写真に撮って後で調べるくらいにしよう。標高2800メートルあたりでハイマツの茂る尾根に出ると，正面に突然，仙丈岳と甲斐駒ヶ岳が柔と剛対照的な姿を現した。さらに，尾根伝いに砂礫の道を40分程行くと肩ノ小屋（3000メートル）に着く。まず，例によって缶ビールで一息入れ，昼食を取る。この小



仙丈岳





甲斐駒ヶ岳

屋には水がない。天水利用である。したがって登山者の飲水は約150メートル下まで汲みに行かねばならない。仕方なく急坂を下って行った。水場と言ってもほんのチョロチョロしか出ていないので石油缶に溜った水を汲む。昼食休憩の後12時半空身で北岳へ向う。時間的には十分余裕があり，先の北岳山荘（水洗トイレがあるとか）まで行って泊まるべきかも知れないが，少しのんびりするため肩ノ小屋に泊まることにした。約1時間ほどで標高3192メートル日本第2の高峰北岳頂上である。さすがに素晴らしい景観，拙い表現では表しきれない，360°の大パノラマである。しばらくすると次第に雲が広がり視界が悪くなった。富士山は全く見えない。明日に期待し小屋へ下った。

16時半早い夕食であった。この小屋も結構混雑していた。ここでも先の犬の人と一緒だった。

三日目4時半起床，きょうも快晴である。はやい朝食のあと再度北岳頂上へ向う。富士山がシルエットで秀麗な姿を見せていると言っても頭の部分だけでほとんどは雲の中。しかし，昨日とちがってまさに360°の大パノラマが眼前に広がっている。南アルプスの山々は言うまでもなく，中央，北アルプスまで見える。眼下南へ向って白峰三山の間ノ岳，農鳥岳への尾根道がずっと続いている。さらに奥の方に丸い優しい感じの塩見岳が望まれる。山の名前もまた花の名前と一緒で分かりにくく，覚えにくいものだ。地図を見たり，人にきいて漸くその時は納得するのだ。あまり広くない頂上は人，ひと，ヒトで一杯である。頂上での眺望を満喫したのでゆっくり写真でも撮りながら下山することにした。きのうの往復は午後だったが，きょうは午前であり光線の具合は全く異なり目にする景色もそれぞれ違った様相を呈しており楽しみである。時々刻々光によって変化する風景を見ているとフィルムが何本あってもきりがないが写真に表現するのもまたむつかしい。肩ノ小屋に着いてビール休憩した後，昨日の登路ルートを再び下ることにした。この頃には雲が多くなり

筆者北岳頂上にて

雪渓より北岳を望む

富士山は全く見えない。途中きのう泊まった白根御池小屋に寄って3日振りに洗顔，洗髪，冷水で体を拭きサッパリした気持になり，さてビールと思ったら“ビール品切れ”の札が貼られているのが目についた。誠に残念の極みである。仕方がないので美味しい水で我慢し，早目の昼食をインスタントラーメンとコーヒーで済ませ一路広河原へ下る。大樺沢の雪渓，渓流で南アルプスの名残を惜しみながら…。

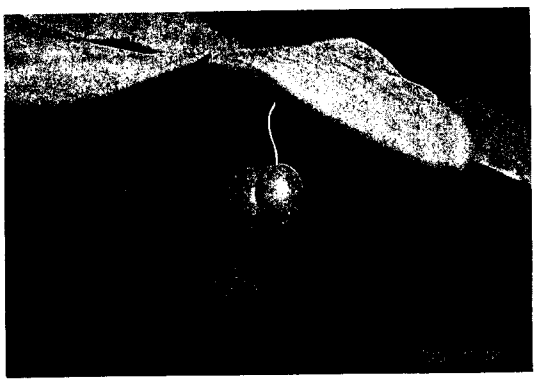
14時半頃大樺沢出合に着いてやっと飲めると思ったところへ乗合タクシーが待っており，客集めをしているのにつかまり10人程がすぐ集り即出発となった。乗った車の運転手が山梨，甲斐の歴史，政治経済になかなか詳しい人でその蘊蓄を観光ガイド調に披瀝してくれたので退屈しないで約1時間程で甲府に着いた。サービス精神の旺盛な感心な運転手であった。降りたときお客に名刺を配ってまたのご指名を頼んでいた，なかなか抜け目がない。お蔭で予定よりはやく着くことができた。

駅前で蕎麦と生ビールで無事を感謝したあと，，16時46分発臨時の“あずさ82号”に乗り込んだがこれも空席がなく，買い込んだ缶ビールをデッキで飲みながら18時30分無事新宿に帰着。

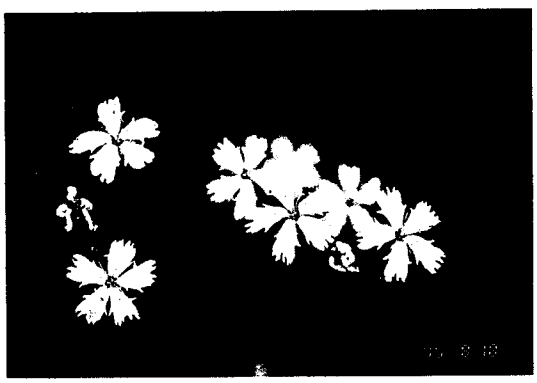
それにしても，山も暑かったがそれ以上に下界のなんと暑いことだろう。南アルプスは，北アルプスのような華やかさはないが，緑の多い，アプローチの長い，どっしりとしたスケールの大きい，男性的な山塊である。そんな印象を持った山行であった。今回は昨年にくらべ体調も良く，心配した下りに起こる膝痛も起こらずにすんだ。これは今回はじめて試みた遠赤外線サポータの効果かも知れない。この効果は，その後の山行きで確認されたと思う。もし，慢性膝・肘痛の方がおられたらお薦めである。今度行く場合も，時間的，行程的にビスターリな計画が必要であろう。この山はまた別の季節に是非訪ねてみたいと思う。これで’95年の私の夏も終った。これから秋山の行先をどこにしようかと，しばらくは山の地図と写真を楽しむことが多くなるだろう。

その秋山と言えば，9月末に苗場山（2145メートル）の紅葉と芝紅葉を見に2泊3日（テント泊）で行ったのと，11月初めの連休に1泊2日（山小屋泊）で黄葉と雪の秋と冬を一緒に味わう素晴らしくまた，楽しい山行－北八ガ岳の天狗岳－をしました。

最後に蛇足ながら，甲府駅前にはこれといった店は見当たらなかったが，お土産として澤田屋の“くろ玉”がお薦めである。他にはない美味しい生菓子で，家の女達に好評であった。



タケシマランの赤い実



センジガンビ

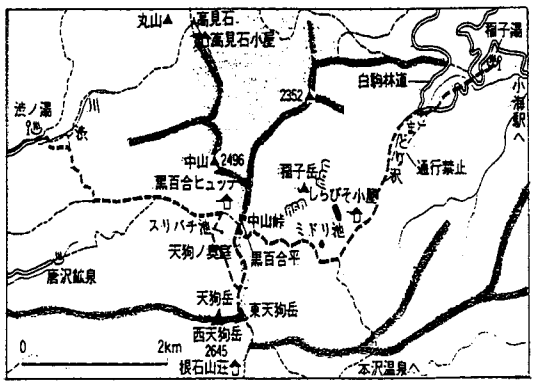
ずいひつ　北八ヶ岳／天狗岳山行記

＊＊＊＊霧氷と紅葉と出湯のハイク＊＊＊＊

三　浦　吉　成*

11月の連休，季節もよし家に居るのが勿体ない何処かへ行こう，山の会の計画の中には自分の気を誘うものはなかったし，今回もビスターリ（ネパール語で＝ゆっくり，ゆったりの意味）な計画を立て，早速先日の例会後の飲み会で隣席し意気投合したＴさんを誘ったところふたつ返事でＯＫ，これで決まり。今回は楽しい山行になることだろう。

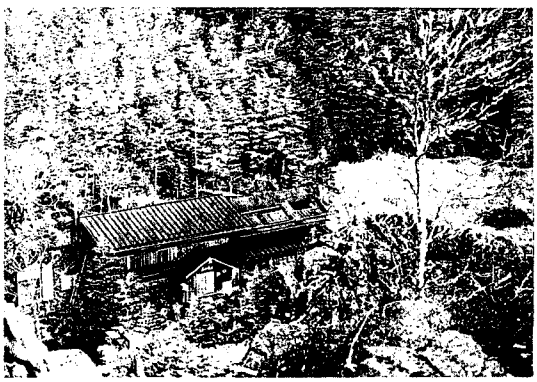
日程は11月３日（金）～11月４日（土）１泊２日の山小屋泊とし，行程は新宿～茅野駅～奥蓼科（渋の湯）～黒百合ヒュッテ（泊）～中山峠～天狗岳～ミドリ池／しらびそ小屋～稲子湯（入湯）～小海駅～小渕沢～新宿



11月３日新宿を６時37分のあずさ81号（臨時）で発ち９時17分に茅野駅に着く，さいわいＴさんにとって頂いた指定席のお陰でゆったり快適な２時間半でした。奥蓼科（渋の湯）行のバスは10時発で時間が相当ある。時間が勿体ない気がしてタクシーで行くことにしたが，今度は二人ではお金が勿体ない気がして，バス待ちの行列の同格好の人達に相乗り依頼の声を掛けたが誰も同じ行き先の人はいないため結局ふたりで行くことになった。

天気は上々，秋晴れの申し分ない日和，車窓からは黄金色に輝く黄葉の木々と，その背景に八ヶ岳がどっしりとした姿を見せている。ところがその八ヶ岳の上だけ雲が覆っているのだ，おまけに頂上付近は何だか白っぽい，雪か，霧氷だろう。紅葉と雪が一緒に見られる絶好の機会に期待で胸がワクワクする。今回はＴさんもそうだが年賀状用の写真を撮ることが目的でもあり，良い写真が撮れることを期待して，９時50分奥蓼科（渋の湯）に着く。何年か前春に来たときはまだ一面雪があったことを思い出した。それにしても途中の天気と打って変わった寒さと風はさっきの小春日和が嘘のようだ。水は水道が凍っていてでないため川の水を汲んで飲み物は（ビール，酒）自動販売機で調達し，身支度を済ませ出発。

この前来た時は，かなり雪が残っていたため歩きやすかったが，今回はゴロ石の表面に雪が付着していたり，凍っているためかなり注意を要する歩行が要求される，登りはまだ良いが下りは大変だ，むしろアイゼンが要る程積もったほうがずっと楽だ。途中，唐沢鉱泉への分岐あたりで昼食をとったがとにかく風が強く，冷たいためそこそこに歩き出した。バス組の人達と思われる連中に何人か追い越された。



黒百合ヒュッテ

＊㈳日本油空圧工業会

3時に黒百合ヒュッテに着く，宿泊の手続きを済ませ，夕食まで時間があるので空身で天狗岳目指して散策に出かけることにした。風とガスのため視界が悪いのと，足元は凍りついて，首にカメラ，手に三脚を持っている（かの，木口小平の心境）ため歩きにくい，時折風に流されてガスが切れたとき目の前に素晴らしい眺望が開けるがそれも一瞬，カメラを構えることもできない。やっと構えても風が強く体が揺れてシャッターを押せない始末だ。それでも何とか出来る限りシャッターを押した。葉を落とした枝に霧氷が白い花を付けサンゴの様であり，山の斜面は桜が咲いた様に美しい姿を見せている。天候の好転は望みなし，あたりも暗くなりかけて，足元も悪いこともあり小屋に引き返すことにした，明日に期待して。小屋に戻って夕食まで時間があったのでふたりで恒例の宴会にはいった。1時間半程して夕食となった，この小屋の食事のシステムは他の小屋とちょっと変わっている，合理的だ。献立もなかなか洒落ており今までの山小屋に比べてなかなか美味しい。夕食後寝るまで時間があり，さきほどの宴会の続

霧氷の花

落葉した木に咲いた霧氷の花

霧氷のためサンゴの様な落葉樹

斜面が霧氷で桜が咲いた様

きをやることにした。美味しいといえば，持参したうるめ鰯の干物を焼いて酒の肴にしたのが格別であった。Tさんにも好評で花丸ものである。先日の苗場山にも持参し好評であったが，これはお薦めである。缶ビール2本，お酒5本（缶）も終了し，8時になり寝ることにした。大半の人達はすでに床に入っている。夏の北岳肩の小屋では畳1枚にも満たない幅に2人寝たが，ここではふたりが十分寝られる余裕があり助かった。布団，毛布とも割合しっかりしていた。例によって周りに迷惑の掛からないことを祈る。Tさんは危険を察してかちゃんと耳栓を用意していた。

11月4日5時半起床。外は曇り空，木々は昨日より白さが増しているようだ。気温は－4℃と寒い。6時朝食を済ませ，7時半頃昨日のルートを東天狗岳に行くことにした。9時東天狗岳頂上（2640メートル）に着く，ガスで全く見えない。これでは期待した山頂からの年賀状用の写真は諦めざるを得ない。頂上標識でTさんとのツーショットだけ，時々ガスの切れ間から見える景色を眺め，持参した熱いお茶を飲みながら30分程い

東天狗岳頂上の筆者

たが晴れる気配がなく北八ツ第一の期待した展望は得られずやむなく下ることにした。10時頃にはガスも晴れてきた。皮肉なものだ，よくあることではあるがなぜもっと早く晴れてくれなかったのかと思う。下りる途中振り返って見ると，東天狗岳と西天狗岳の双耳峰を結ぶ稜線が陽に輝いて美しい姿をみせていた，また天狗の奥庭，スリバチ池を下に見ながらの快適な道である。

このルートは昨日と違って全く凍っていないため歩きやすい。11時半ヒュッテに着く簡単な昼食を済ませ12時20分ヒュッテを発つ。ミドリ池，しらびそ小屋経由し，稲子湯へ向かう。稲子湯の温泉が楽しみだ。下りの道は風もなく，雲も切れて暖かく，両脇の林の黄葉が日に映えて美しい。また，樹間越しに先程天狗岳への途中で下に見た稲子岳の大きな岩壁が偉容な姿を現わす。背後に天狗岳が望まれ，静寂につつまれたミドリ池で小休止，しらびそ小屋を後にしばらくすると突然登山道に二本の鉄のレールが出現する，かって木材の切り出しに使ったトロッコのレールが残った道は，かっての繁栄を偲ばせ，時代の変遷を感じさせる。

3時稲子湯（単純炭酸泉／リューマチ，神経痛に効能あり，また飲用すれば胃腸病に特に効くとのこと）に着く，入湯時間（3時半まで）に間にあってホッとした。小海行のバスは4時8分発であり十分ゆっくりできる。湯上がりのビールが旨かったことは言うに及ばず。

5時15分小海発の小海線で小淵沢まで約1時間，小海駅ではビールを買う時間も店もなく仕方がないので自動販売機で紅茶を買い，手持ちのウイスキーの紅茶割りで済ませた。おつまみは二人とも

稲子岳

東西天狗岳を望む

トロッコ道

ミドリ池

十分残っている。小淵沢で約40分ほど待ち時間があった，ホームに立食いそばがあり，いい匂いがしている。余程食べようかと思ったが，ちょっと寒い，もう少し落着いた，暖かい雰囲気の店はないものかと外へ出て見た。あった，赤い字でラーメンと書かれた例のノボリが目に飛び込んだ，店の前に来るといつものラーメン屋のイメージとちょっと違うレストラン風である。もう，ウロウロする時間もないのでとにかく入ることにした。店内は外見と違って全くフランス料理のレストラン風である。豚骨ラーメン(800円）を注文する，出てきたのは細めんの上品な味の確かに美味しいラーメンであった。多分他のメニューもさぞ美味しいのだろう。また，器が例の中華そば特有の赤と白の唐草模様風や喜の字の入ったものと違って立派な蓋付の大きな厚肉の陶器の器で若い主人夫婦のこだわりが感じられる店，店の名前もカシニョールと洒落ており，店の雰囲気，若い主人の応対も気持ちがいい，まさに鄙には稀な店である。また，ここのビールは大瓶(500円）であったことも特筆に値する。お薦めの店である。

小淵沢７時６分発のあずさ74号で新宿へ，自由席であったが，幸い二人とも座れたのでホッとし，９時過ぎ無事新宿に着いた。生憎，天狗岳頂上はガスで何も見えず年賀状用の写真はついに撮れなかったが，－Ｔさんは霧氷を背景に持参したモデルを使ってそれなりに賀状用の写真をものにした様だ－とにかく思いがけない霧氷と黄葉それに温泉と楽しい山行でした。健康な体と一緒に行ける仲間と銃後を守っていてくれる女房に感謝をしてワープロの「終了」にマウスをクリックする。また，つぎの山行を楽しみに。

倒木に寄生したコケの愛らしい赤い花

稲子湯温泉前で

ずいひつ

中高年のクロスカントリースキー初体験記

三　浦　吉　成*

またも拙文で貴重な紙面を費やすことは心苦しく，申し訳ありませんが枯れ木も何とやらで，恥を忍んで投稿する勇気に免じてお許し頂きたい。

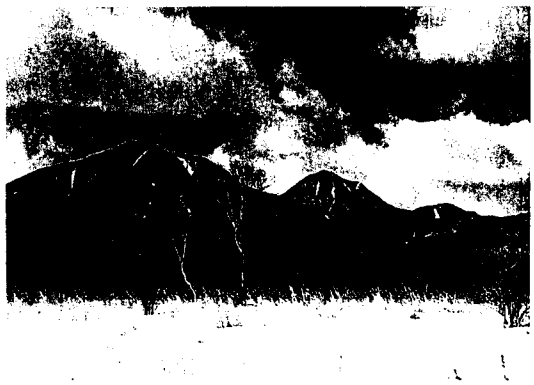
この冬からクロスカントリースキーなるものを始めました。と言うのは，56歳の身には冬山や山スキーはちょっと荷が重く若者には付いて行けそうもなく，たとえ行っても迷惑をかけることになってもいけないと思い，ほかに何か冬のスポーツで山行の延長でできることはないかと，ただし，自然との交わりとともに写真を撮ることを条件にである。所属する山友会の冬の山行計画の中に初心者向けのクロスカントリースキーがあったので初めて参加することにした。

スキーと言えばゲレンデスキーは30数年前にはじめ，一時は熱中したが東京を離れて22年の間には3，4度しかやっておらず，最近はすっかりご無沙汰していると言うより意欲が無くなっている。我々がスキーを始めたころは，毎週土曜日の夜行列車（土曜日は休みではなく半ドンでした）に乗るため寒風吹きすさぶ上野駅で昼から何時間も駅の構外まで行列して，それも殆ど座れる保証は無くただ，列車に乗れるか否かだけで，まともにドアからは乗れず窓からリュックやスキーを入れ，通路や座席の下やデッキに新聞紙を敷いて仮眠しながら行ったものです。それも日曜日の夜には帰るか，月曜の朝早く帰ってそのまま会社に出たものです。したがって行先も限られ上越沿線が多かった。まれに連休や休暇がとれるときは泊りがけで志賀高原など信越沿線に行ったものです。今ではとても考えられないし，とてもできないことです。いまは山行にしても，スキー行にしても特急の座席指定で行く，いや行ける時代ですから。

話が飛びましたが，一応スキーの経験（自己流の荒っぽいスキーでスキーは2台程折ったが幸い足の方は一度の骨折もなく済みましたが）もあることからクロカンなら何とかやれそうな気がしたし，幸い一緒に始める仲間がいたので意を強くし私も始めることにした。

最初は，1月21日（日）日帰りで奥日光の光徳牧場を中心とした初心者向きを含め各種のコースを備えたところである。朝5時起き，浅草7時10分発の東武浅草線で9時12分日光に着きそこか

光徳牧場



男体山

*㈳日本油空圧工業会

らバスで約1時間程で目的地に着く。天気は快晴で申し分なく，思ったより暖かい。雪は思ったより少ないがスキーは何とかできそうだ。男体山がその美しい姿をくっきりと見せている。アストリアホテルで靴とスキーを借りて荷物を預け空身で出発。今は何でも借りられるから便利である。靴はスニーカーのようで非常に軽量であり，スキーもまた細く，軽くやや短めでありゲレンデスキーとは大分違った装備である。見た目には扱いやすい感じで年寄り向きである。はじめに近くの牧場を一回り脚慣らしをしてから，林間コースへでる。コースは平坦でほとんど歩くコースで，はじめての者には手と脚の連携動作が何となくぎこちなくスムーズに行かず，無駄な筋肉を使っているようだ。みんなについて行くのがやっとの有様である。ゲレンデスキーでは何でもない下り坂でも，何となく要領が異なるせいか尻餅をついてしまう。スキーにエッジがなく，道幅も狭いため止まるのが難しい。

きょうは5キロ程歩いて帰る時間となり，ホテルの温泉で汗を流した。日帰りであまり時間がないためゆっくり温泉気分を味わえなかったのがちょっと残念であった。でも，きょうはクロカンの初体験，入門編としてまだ要領は摑めなかったが，何となく雰囲気と言うか，気分を味わうことはできたし，自然の中を自分のペースで歩くことは健康的にも，精神的にも非常に良いことだし結構面白いと思った。

15時38分のバスで日光駅に，16時50分東武日光駅発の電車で，帰路についた。車中では例によって仲間の宴会となりワイワイ，ガヤガヤしている内に浅草に着いた。

初めての経験で相当無駄な筋肉を使ったため，明日以降腕や足の筋肉痛を覚悟していたがそれもほとんどなかった。これも普段のトレーニングの成果か？健康と言えばクロカンは全身の運動でありダイエットには抜群である，その向きの方には是非お薦めである。家でこの話をしたらお父さんはお腹の脂肪を減らすため是非続けなさいと励まされた。

今回は団体行動で，自分にも余裕がないため，ゆっくり写真を撮るチャンスがなく写真面では不作であった。次回に期待しよう。

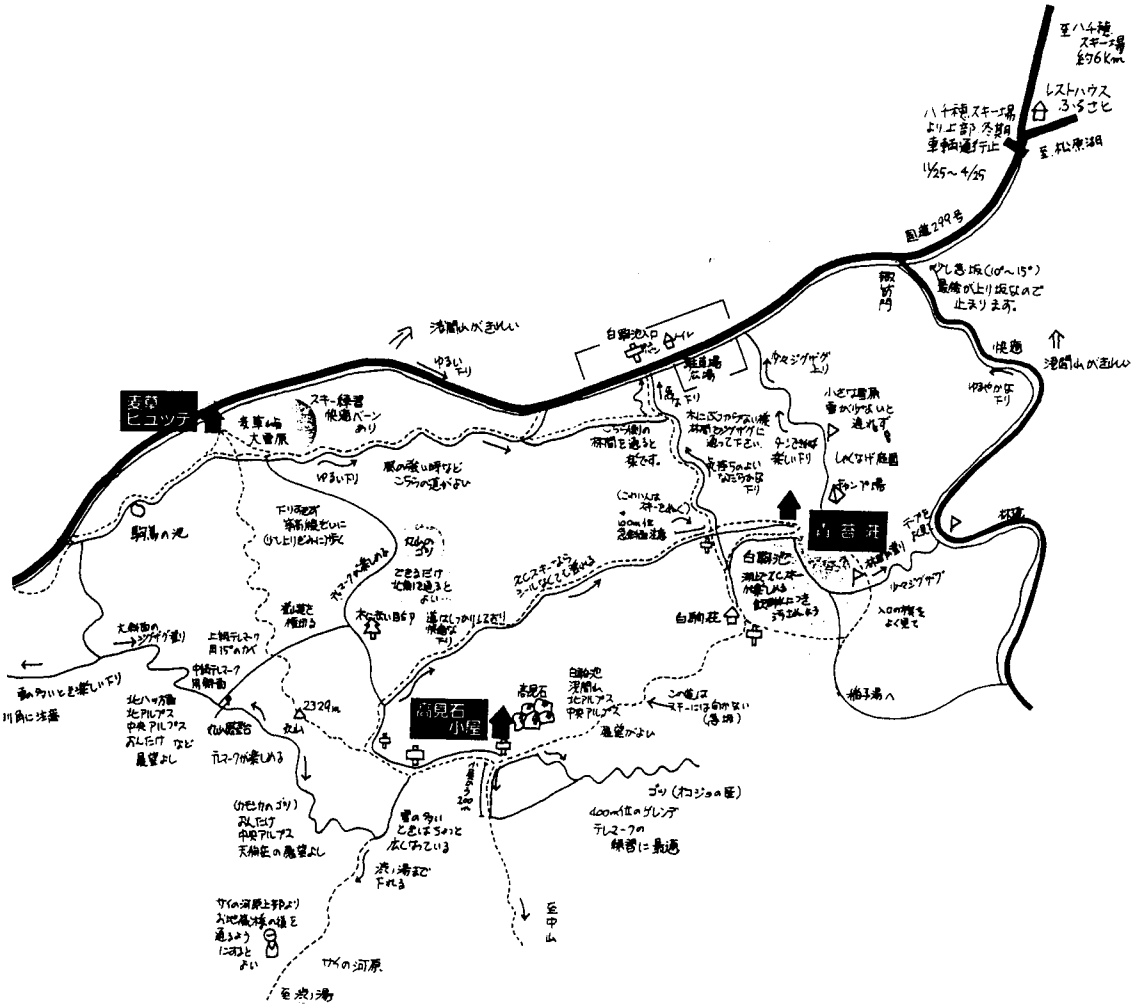
熊笹の影

筆者

2回目のクロカンの機会は思ったより早くやってきた。日程は2月17日（土）～18日（日），行先は北八ヶ岳で今度は山小屋泊でゆっくりできる。メンバーはリーダーのAさん，Jさん，Tさんと小生の4人である。Jさんはクロカンは初めて，Tさんと小生は奥日光以来2回目である。行程は2月17日新宿～茅野～奥蓼科（渋ノ湯）～賽の河原～高見石小屋～白駒池～青苔荘（泊），2月18日青苔荘～（林間コース）～麦草峠～（国道）～青苔荘（昼食）～青苔荘～（林道）～（国道299号）～八千穂レストハウスふるさと～（タクシー）～八千穂駅／小海線～小淵沢～新宿。

2月17日朝天候は曇り，昨夜雨から雪に変わったのか屋根や草叢がうっすらと白い，あまり天気は期待できないかも知れないそんな気がする今回の山行である。

新宿7時発あずさ51号に乗る，指定席は既に満席，自由席に何とかバラバラに座れた。9時16分茅野着，10時発のバスに乗り込む。バスの乗客は15人程で思ったより空いている。途中，九十九折



れの雪道で下ってくる乗用車とニアミスがあったが無事渋ノ湯に着く。雪は降っているが風がないので思ったほど寒くはない。渋御殿湯前でそれぞれ身拵えを済ませ出発。

雪道を行く

賽の河原を行く

じっと我慢の石楠花

白駒池のかまくらから

リーダーのＡさんを先頭にＴさん，小生，Ｊさんの順に登行を開始した。結構積雪量が多い，後で聞いた話では今年は北八ヶ岳にしては珍しい積雪量だそうだ。比較的緩やかな登路を行くが，部分的にはアイゼンがあったほうが楽と思われる箇所もあるが，美しい樹林帯を抜け，ぱっとひらけた賽の河原にでる。晴れていれば，中央，北アルプスの展望が素晴らしいのだが，生憎の雪でそうはいかず残念であった。登山道の脇では石楠花の木が寒さにじっと耐え，破れ傘のように葉を垂れ春を待つ姿がいじらしい，花の頃は感激ものだろう。

約2.5時間程で高見石小屋に着く，小屋のテラスを借りて昼食をとることにする。風もあり，かなり寒い，気温は－10℃である。昼食のメニューはチーズフォンデューとワインと山の食事とは思えない。豪華版である。材料はＴさんに用意していただいた。人参，じゃがいも，アスパラガス，生ハムと赤，白ワインいずれも十分冷えている。

高見石小屋での昼食
（チーズフォンデュ＆ワイン）

白駒池

それでも熱いチーズに浸すと何とか暖かくなり白い息を吐きながらみんな美味しくいただいた。やはり飲み物はワインがマッチするようだ。とにかく寒いため飲むほうはみんなあまり進まず，昼食もそこそこに今晩の宿である青苔荘に向けて高見石小屋を後にする，今宵の宴を楽しみに。

しばらく行くと白駒池に出る，湖面の氷結は勿論であるが新雪がかなり積もっている，リーダのラッセルで白駒池を横断し，目前の青苔荘に向かう，人影はほとんど見えない。

青苔荘に着く，夕食までまだ時間があるが，きょうはスキーはやめることに全員一致，そこでちょっとＴさんと周囲を散策することにした。白駒池に降りると誰が作ったのか立派な“かまくら”ができていた，中へはいってみたがなかなか快適である。この中で宴会をやるのも一興ではないかとのＴさんの意見に賛意を表しながら宿に戻る。

夕食にはまだはやい，みんなで一杯やることに

した。食堂には懐かしい薪ストーブと豆炭炬燵があり暑いくらいである，ビールが旨い。人が少なく一つの炬燵に4人と贅沢なくらいゆったりとした気分で寛いでいるうちに夕食となり，そのまま宴会が佳境に入った。

夕食がまた豪華版で山小屋とは思えない鍋物である，益々お酒が美味しくなる。ビールに始まり，リーダー持参のお薦めのウオッカ，日本酒，ウイスキーとさらに後で始まる他のパーティとの懇親会では宿の主人自慢の“どぶろく”をご馳走になり，まさに飲酒5種競技である。

夕食後宿の主人を中心に他のグループと懇親会となった。主人は素面の時も，酔った時も口は悪いが目は優しく，人の良さそうな，一見，大村昆を思わせる風貌である。お陰様で同宿の若者たち2パーティともどもみんなは楽しいひとときを過ごすことができました。我がリーダー殿もすっかりいい気分となり，いささか酩酊気味だったと思われる。ちょっと飲ませ過ぎたかな，宴も終了し部屋に戻る途中でちょっとした事件が起こることになるが，何とか大事に至らず不幸中の幸いであった。この貴重な経験を無駄にしないようにしよう。わがパーティのJさん，Tさんはじめ宿の主人はじめお手伝いの方には大変心配やお世話をかけました。事件と言うのは今だから笑って話せるが，酩酊したリーダーを2階の部屋へ連れていく時，階段（山小屋の階段は一般に狭く急である）の途中で足を踏み外し二人一緒に真っ逆様に転落し，ドアのガラスに頭を突っ込んだのである。当然二人とも手と顔をガラスの破片で数カ所傷を負ったのである。幸い傷は急所を外れており，また，お陰様で皆さんの適切な救急処置で出血は何とか止められた。状況がもっと悪ければこんな山の中，まして雪のなか手の打ちようがなかった。リーダーは顎の下にガラスが刺さり，小生は右手動脈近くを切っていたので，もし，もう少し位置がずれていたらと今考えてもぞっとする。

翌日，外は新雪がかなり積もっている，夕べ相当降ったようだ。雪は止んでいるが太陽は顔を見せない，きょうもあまり期待できそうもない。我がリーダー殿は夕べの事件のことは全く記憶にないらしい，説明を聞いて自分の傷を見てやっと納得したらしい。おまけに宿酔で昼まで寝ているとのことで，我々3人は朝食を済ませ，2時間ほどクロカン気分を味わうことにした。小生は夕べ一緒に転落したとき下になっていたため胸を打撲したらしく軽い痛みを感じるがとくにスキーが出来ないほどではない。

コースは青苔荘から林間コースを行き，麦草峠大雪原を経て麦草ヒュッテから国道299号を下って白駒池入口から林間に入り青苔荘に戻る，素人には手ごろ，いや足ごろのコースである。新雪が深くてやや滑りが悪いのが不満ですが，雪は止んで，時折薄日が射すこともあり，コースはなかなか快適でした。天気もまずまずで時間があればもっと別のコースも回ってみたいような気もするが。予定通り11時前に青苔荘に戻った，リーダー殿は概ね回復しているようだがまだ完全とは言えないようである。とにかく宿の土間を借りて昼食をすることにした，これも空いているからできることです。メニューはきのうの今日でもありアルコールはワインを少々で済ませた。でも，きのうのように寒さに震えながらでなく，ストーブの傍でゆっくり落ち着いて食べられた。

青苔荘前

麦草大雪原

食事も済み，12時45分青苔荘を出た，流石にリーダー殿はスキーを履くと別人のようになるとは聞いていたがその通りである。帰路は，白駒池を横断し，林間コースを抜け，林道に出て諏訪門から国道299号までをクロカンスキーで下り，さらに国道を下る。国道も新雪が深く滑りが悪い，まだ，歩行の下手な私には時間がかかる，リーダーは遙か前方を行き姿は見えない。クロカンスキーが初めてというＪさん，２回目のＴさんはなかなか上手にいっている。帰路は全荷物と登山靴を背負うわけでかなりの重量になる，右手でストックを突くと胸が痛む，途中Ｊさん，Ｔさんに小生の重いリュックを軽いものに交換して貰いながら何とか下った。何故かいつも小生のリュックは他の人に比べ重いようだ，余分なものを持ちすぎるきらいがあることは確かだが今後の検討課題である。この点はいつも家内からもあなたの荷物は何故そんなに大袈裟になるのかと指摘されていることであり反省している。この際，今後軽量化の工夫をしようと思う。こんどＴさんが軽量化対策委員長になってくれるとのこと。

小屋を出て約３時間で予定の場所に着き，スキーと靴を脱ぎ登山靴に履き替え，レストハウス“ふるさと”前で呼んでおいたタクシーにて小海線八千穂駅に15時50分ごろ着き，丁度57分の電車に間に合った。田舎の駅にしては連絡が良すぎる，お陰で駅前での一休み，反省会もできず小淵沢へと。小淵沢駅のホームは雪混じりの冷たい風が吹き抜け，大変寒い，北八ヶ岳よりよっぽど寒さが身にしみる。各自駅弁，飲み物，お土産を買って雪のため15分遅れのスーパーあずさ８号（新型車）に乗り込む，自由席は満席，しばらく立ったままで，指定席が空いた甲府～大月間で４つ席が空いたところで，漸く弁当を食べることにした。

大月を過ぎて，みんな弁当を食べ終わったところで検札が来たので席を立った。19時20分八王子に着く，それぞれ元気に家に向かった。若干トラブルはあったがとにかくみんな無事に帰ることができて良かった，天気が悪く期待したシャッターチャンスがなかったことは残念だが，また，いくつかの反省点を残しはしたが，まずは楽しいクロカンでした。またを楽しみに。

それにしても，東京のなんと寒いことでしょう，きのうは大雪だったそうだ。

帰宅してから１日経っても胸の痛みが止まらず，病院に行ったところ肋軟骨骨折の診断で２～３週間はかかるとのこと，幸い日常生活には支障はない程度なのだがしばらくおとなしくしていよう。これも初体験である。

ずいひつ

地上の災難を逃れた山行

三　浦　吉　成*

標題の意味はこれだけではなんのことかおわかりいただけないでしょう。

地上と言うより地下鉄と言ったほうが正しい，あれからもう既に1年半が過ぎようとしています。そうですあの忌まわしい，地下鉄サリン事件です。

昨年の3月21日㈫が祝日のため20日㈪滅多にとらない休暇をとって久しぶりの山行を思いたち出かけました。お陰で災難に遭遇せず助かった次第です。いつもの通り出勤していれば，霞ヶ関乗換えが8時10分前後で丁度事件発生時刻でした。したがって，生命の危険はともかく大なり小なり何らかの被災は免れ得なかったと思うとともにわが身の幸運に感謝した。当日仕事をサボって難を逃れた私と，真面目に勤めに行く途中で不幸にして被害に遭われた多くの人達，全く世の中何があるかわからない。でも，これは天災ではなく，一部不法者による狂気としか思えない行為の結果であり被災者とその家族の者はなくに泣けないし，まったく許すことのできない憤りを禁じ得ないと思います。首謀者はじめ一味の大半は逮捕され，今裁判が始まっていますが，刑が決まるまでにはこれから何年いや何十年かかるか分からない，21世紀に持ち越すことは明らかである。その間には被災者の方で決着を見ずに亡くなられる方もでることでしょう。民主主義と人権尊重主義にまどろっこさとなんとなく納得の行かない点を感じるのは一人私だけではないと思います。心情的には犯人たちを市中曳き回し，打首獄門にしても飽き足らない思いです。今風には東京タワーからバンジージャンプ（ロープの長さを長くして）を世界ネットでＴＶ放映などしては如何。ちょっと過激な表現になってしまいましたが，飲んだ時によく冗談で出る話で事件を起こした者に比べれば人に何の害も与えるものではない。このニュースを知ったのは，3月20日11時52分富士急行線三ツ峠駅で下車し登山口へ向かう途中，いつものようにポケットラジオで音楽でも聴こうとしてチューニングしたらどこの局も大変慌ただしいアナウンスと救急車のサイレンの音で一杯でした。これは何か事件だと思い，聴いていると地下鉄霞ヶ関駅での状況が何となく分かり，これは大変だと事務局職員の方は無事だろうかと確認の電話をいれたとこえろひとりＳさんが影響を受けられ軽い症状がでているとのことでした。とにかく軽症の様なので安心して歩を進めた。（後日Ｓさんは病院通いと幾度かの警察からの事情聴取を受け大変の様子でした。でも，何の症状もなく無事に快復されてよかった）

話を山に戻そう。三ツ峠は開運山（1785.2M），御巣鷹山および木無山の総称で呼ばれている山で山頂からの眺めは富士山の展望地として知られている。ここから眺める富士山はほぼ左右対称形で美しい姿を見せている（宝永山など瘤は見えない）のでアマチュアカメラマンの集まるところです。この前三ツ峠に来たのは92年11月22日でまだ単身赴任の頃でした，あの日の朝は素晴しい快晴に目覚め，富士山の写真を撮ろうと思い，6時30分武蔵小金井発（単身赴任者用マンションが武蔵小金井駅前にある）で期待に胸膨らませでかけた。ところが登るにつれて前日に降った雪があちこち積もっていたり，かなり大きい霜柱が立っていたりで寒気も厳しくなってくるし，頂上ではさらに最悪なことにガスが立ちこめ視界がまったくきかず，富士山どころか50M先も見難い状況でした。1枚の写真も撮れずやむなく下山したことを覚えている。

今回は前回のこともあり70％程度の期待をもっ

＊㈳日本油空圧工業会

てでかけたのである。三ツ峠山へのルートはいくつかありますが，今回の行程は三ツ峠駅～達磨石～石割権現～八十八大師～三ツ峠山頂（三ツ峠山荘泊）～木無山～霜山～河口湖へ下るコースとした。ところで三ツ峠山の“峠”は本来の峠とは関係無く尖った小峰を表すトッケあるいはトッキは転化したもの，つまり三つの頂きがある山と言うことで，三つの山は前述の開運山，御巣鷹山および木無山を言い，開運山がもっとも高く約1785Mある。（横山厚夫著－東京から見える山を歩く－による）

大山祇神社を過ぎてしばらくすると達磨石（写真1）に着き，ここで達磨石の由来を記した看板を見て一服する。説明によると石に彫られた文字はアークと読み，密教の御智如来の中心である大口如来を意味するとのこと。ここから登りは急になり，足元も石がゴロゴロして歩きにくい。道の日陰には雪が残っている。しばらく行くと八十八大師，空胎上人の石碑のほか石地蔵（写真2）が斜面に並んでいる。一体いったいがそれぞれ表情が違っている。登山者の安全を守ってくれていることに感謝しながら前を通り過ぎるとやがて尾根

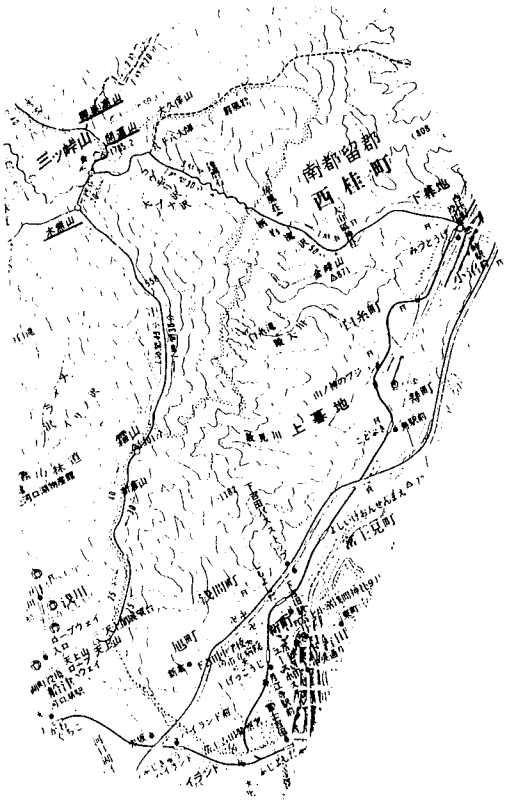


写真1　達磨石

写真2　石地蔵

にでる。尾根に出ると富士山が急に姿を見せる。富士山は見えるがすでに霞んでおり，写真にはなりそうもない。とにかく1～2枚シャッターを切って先へ進む。やがてロッククライミングの練習場として有名な岩場（屏風岳）の真下に出る。途中人ッ子ひとり会わずにきたが，ここでロッククライミングの練習を終え休憩中の一組の男性を見かけた。岩場の横を通るとき見上げると，なんと岸壁の上部から巨大な氷柱－ツララとも言う－（写真3，4）が何本も下がっているではないか。しかも陽に当って少しずつ溶けており，足元には落下したツララが何本も転がっている。こんなものの直撃を食らってはひとたまりもない。朝の幸運も帳消しである。急いでその場を離れたが，背筋に汗をかいているのが感じられた。この岸壁の下から見上げる三ツ峠山の斜面のところどころに

写真3　氷柱の下がる岩場

写真4　氷柱（溶けて時々落下する）

あたかも桜が咲いているのかと思わせるように真っ白になった木が何本か見える。それは霧氷でしろくなった木々であることは直ぐわかった。とても美しい光景である。

（写真5，6）最後の急坂を行くとやがて頂上の開運山である。山頂の眺めは富士山の展望地として知られるだけに素晴らしい。条件が良ければ奥多摩，奥秩父，八ヶ岳，南アルプスなどの展望が可能である。15時半三ツ峠山荘に着く今晩はここに泊まることにする。恒例によりまず缶ビールでひとりで乾杯！とくにきょうは朝の事もあり格別である。山荘横の富士山展望の絶好の場所はすでに数人のアマチュアカメラマンの三脚がセットされ立錐の余地はない。みんな夕景，夜景および朝焼けの富士を狙っての準備である。仕方なく当方は，少し下がった場所の雪の中にカメラを構える

写真5　霧氷の咲く三ツ峠

写真6　霧氷の花

ことにした。ベストポジションはすでに占拠されているため仕方がないがこれから富士の夕景と夜景を期待して宿に帰って酒でも飲んで時間を潰すことにした。

宿に一枚の富士の夜景を撮った写真があり感激した。自分もこんなチャンスに会えたら－－－それは夏の夜景で眼下の河口湖周辺の灯りと富士山を登る登山者のライトが一条の筋となって富士山頂に繋がっている光景全体が薄いブルー調に仕上がっている素晴らしい写真である，自分の好みの仕上がりですがきょうは無理である。いつかきっと是非撮りたい光景です。漸く日も西に傾きかけてきたので状況を見にカメラのセット位置に行った。時期的に今は日の沈むのが南によっているため富士山の夕焼け，シルエットなど絵画的な光景はあまり期待できない。

その後夜景を撮るべく雪のなかでの作業にかかったが1枚の写真をとるにも露光時間がかかり，一発一中とはいかないため何枚か条件を変えて撮るとなると大変である，セットしてから宿へいちいち戻るわけにもいかずその場で待つことにした。

写真7　早暁の富士山

今度はテント持参で来るべきだと思った，本当に狙った写真をものにするには昼夜にかかわらずそうするべきであろう，行きあたりばったりに偶然を期待して撮ろうと思ってもそうは烏賊の何とやらでしょう。それでも寒空で1時間ばかりねばって夜間の写真を撮ったが満足の行くものはなかった。早暁の朝焼け富士（赤富士）に期待して宿に戻り一杯飲んで寝ることにした。翌朝5時に起床し場所確保にむかったが，昨晩通り既に良い場所は三脚の列に占拠されていた。隙間を探して何とか三脚をセットした。しばらくして夜が明けてきたが，期待した赤富士にはならなかった。富士山の右上方に名残の月がかかりいくらか絵になると思うが，富士と月の距離が遠すぎるため写真としてはいまいちである。（写真7）

朝食を済ませ河口湖へ向かって下山することにした。このコースは前方に富士山と河口湖を眺めながら下る素晴らしいルートである。途中1時間程歩いたところに河口湖と富士を望む絶好の場所がある。ここはテントを張ってチャンスを待つに値する場所と思う。一服し河口湖へ向かう。途中1組の中年夫婦と出会っただけで湖畔に着き，湖畔でコーヒー（勿論インスタントですが）を入れて一休みし帰途についた。今回はスタートで大変なニュースを聴き人の運，不運を痛感させられた山行でした。三ツ峠は秋か早春にまた是非来たいと思う山です。それとも向かい側に見える，あの”富士には月見草がよく似合ふ”（太宰治）の御坂山（1595M）も行きたい山です。碑文にあるようにここからの富士の眺めと，6月のツツジから夏へかけての山野草の花と11月の紅葉が素晴らしいとのことです。

写真8　三ツ峠山頂の富士お眺望

写真9　ほぼ左右対称に見える富士

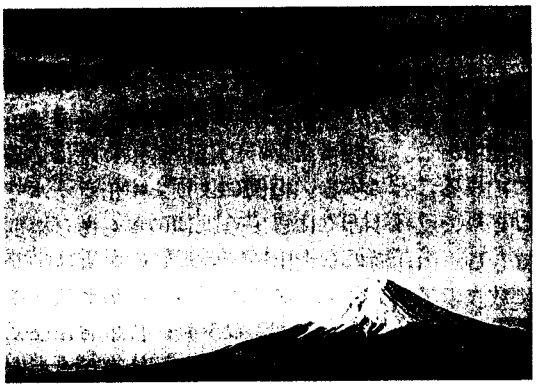


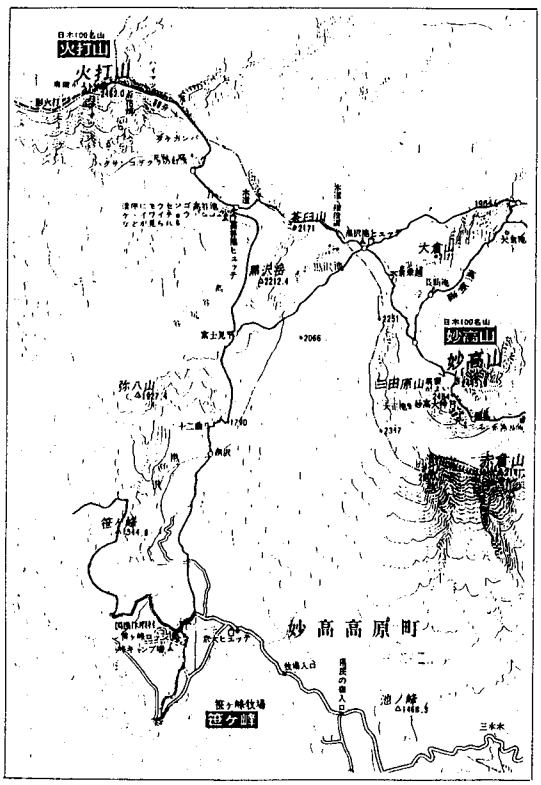
写真10　朝焼けの富士

ずいひつ

越後の山　－妙高山／火打山－に登って

三　浦　吉　成*

越後の酒は時々愛飲していますが，まだ越後の山には登ったことがありません。もういまでは一昨年のことになりますが機会があってはじめて行きましたのでそのときのことを少々書きたいと思います。機会と言うのは，今までのように行き先も告げずに一人で行く山行はそろそろ危険だと家族に反対されていることもあり，幸い家の近くで隔週水曜日に例会と飲み会のある世田谷山友会なるものがあることを“山と渓谷”で知り早速入会することにしました。ところで最近の中高年令者の登山ブームにもかかわらず会員では私が最高令（57才）で若干の不安もありましたが，入会して間もなく標記山行の計画があり参加したわけです。



妙高山(2,446m)，火打山(2,462m）は深田久弥著“日本百名山”の33と34番目に書かれている山です。

1995年6月23日（金）22時に小田急線千歳船橋駅集合。メンバーは男性5名，女性3名の計8名が2台の乗用車に分乗（残念ながら女性は別の車）し，いざ出発となったところでテントを忘れていることに気付き急遽手配するなど若干のトラブルがあったが，無事出発することができた。23時中央高速調布インターより入り，途中渋滞もなく順調に深夜ドライブ，24時過ぎに小渕沢，24時半頃諏訪湖ＳＡ，午前3時仮眠予定地である笹ケ峰に到着。早速テント張に掛り，20分程でテント張が終り軽くナイトキャップのあと，3時半就寝。空には星が見える明日は晴れる（予報では曇り一時雨）ことを期待して眠りに就く。

写真1　黒沢の渓流

*㈳日本油空圧工業会

6月24日（土）6時30分過ぎから雨が降りはじめ，徐々に激しくなる，俺は晴れ男だきっと晴れると内心期待しながらも何となく気分は憂鬱だ。何と7時過ぎやや小降りになり遂に雨は止んだ。7時半には全員起床し，各自それぞれ持参した食料で簡単な朝食を済ませ，テントを畳みいよいよスタート。起きたとき気が付いたのだが，何となく雰囲気がおかしい何だろうこれは，暫くしてハタと気が付いた。原因は俺の“鼾”だと。そう言えば寝るときには確か同じ頭の向きだった隣の人の足が目の前にあったことを思い出した。鼾にたまりかね夜中に向きを変えたらしい。みんな初めての連中で何も知らず無防備のため鼾に悩まされ寝不足となっていたのだ。そのために何となく朝の雰囲気がシックリしないことが理解できた。しかし，リーダーひとりは準備良く，耳栓とアイマスク持参で熟睡したとかでケロットしていた。蛇足ながら以前北アルプスの山小屋の2階に寝た時，隣に居た筈の仲間の女性3人が目を覚ますと影も形も無く，探すと布団ごと1階の入口に避難していたことを思い出した。

9時にスタートして，天気は降ったり止んだりの繰り返しで，スカットしない。まあ，予報から言ってもこんなものと稍，諦め気味で歩を進める。比較的緩やかな登り，人ひとり分の山道の両側には雨に濡れた若葉が美しい木々の中にひときわ大きなブナ（橅）の木が目を曳く。登路途中仲間のひとりはさかんに山菜を採取している。これが後で宴会のときの酒肴になるのだ。山に来て食べられる茸や山野草が採取できる特技があることは素晴らしいことだ。自分は後でご馳走になるだけだ，これも特技？

10時黒沢に到着，小休止。渓流の水音，新緑と

写真2　残雪を行く（富士見平）

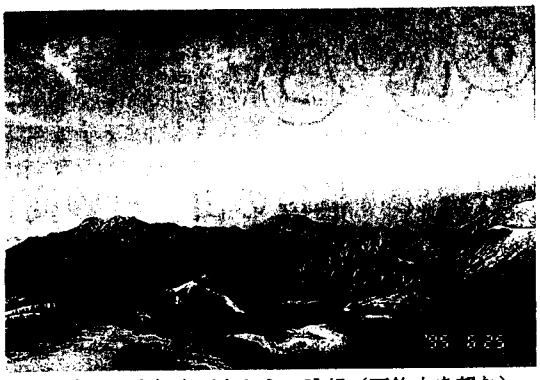


写真3　火打山頂上からの眺望（雨飾山を望む）

三ツ葉つつじ，コイワカガミのピンクやコブシの白い花，シラネアオイの美しい花が目にやさしく映り，これまでの疲れを癒してくれる。沢の水で汗ばんだ手と顔を洗うと冷たさが心地よく肌に染みる。

沢を渡るとこれまでの比較的平坦な登りと違い急坂が始まる，十二曲りを過ぎると一面雪景色となる。残雪である，これから先は一面残雪に覆われた白銀の世界となる。まさかこれほど雪が残っているとは思わなかった。文字どおり12回の曲がりを経てオオシラビソの林の中を緩やかに登って行くと富士見平に着く。小休止リュックを降ろしみんな一枚脱いでいる。天気は時々晴れ間が顔を出す曇りで雨は無くなった模様である。

午後2時高谷池に到着。高谷池は池と名前にあるように湿原であるが，いまは全面雪に覆われイメージが湧かない。近くには高谷池ヒュッテ（赤い屋根の3階建）があるが，水場の近くで，平らでかつ風当たりの少ない適当な場所を見つけ，雪を均しテントを張った。テント設営後火打山に登る予定であったが，まだ天気は曇り空，目指す山頂は雲に覆われているため明日にする。また，明日登る予定の妙高山はみんなアイゼン，ピッケルの装備がないため，この残雪では危険が多いとリーダーの判断から中止し今日はここでのんびりすることになった。山ではよくあることで，残念だがそれもよし，後の宴会が楽しみである，ゆったり登山は多いに望むところ。

午後3時頃から食事の支度にかかり，4時過ぎにはひとつのテントに集合し宴会と食事が始まってしまった。その頃には気になっていた天気もすっかり晴れわたっている。まさに晴れ男の面目躍如と内心自信を強くした。夕方から美しい夕焼

けさえ見られた。白い雪の上に長い陰を落としたダケカンバの木々のシルエットが何とも言えない。ところで宴会の方ですが，例によって誰が持ってきたのがワイン，ビール，日本酒と多種多量？みんな好きだね重い思いをしてよくもって来ますね，全く感心する。あまり人のことは言えないが。ところで前述の登る途中で摘んだ山野草は油炒めやおひたしにしてマヨネーズで食べるなどしたがなかなかの美味かつ珍味でした。それがなんと言う名の植物か聞いたが既に忘却の彼方である。酔うにつれ出るのが唄である，山の唄を主体に何曲唄ったか，全員の合唱，輪唱である。酒は持ってきても流石にカラオケを担いで来る者はなく，本当の空オケである。午後7時半には宴も終了し寝ることにした，また例の件でみんなに迷惑をかけることになるかも知れないが。山では寝るのも早いが，起きるのも早い。明日は好天気が期待できそうだ。

6月25日（日）5時頃には全員起床，軽く朝食を済ませ（夕食と朝食のメニューは何だったのかを思い出せない）みんなで火打山に登ることにした。途中“天狗の庭”の湿原を木道で渡り火打山に向かう。高谷池にはモウセンゴケが多く，8月には湿原が赤く染まるとのこと，また，天狗の庭も高山植物が豊富で8月前後にはそれらが一斉に開花し最高だそうだが，今年は残雪が多く夏道が埋っておりその多くは見られない。しかし，水芭蕉の若葉と白い花が雪解けの中から顔を出している。その他キヌガサソウ，シラネアオイやハクサンコザクラが咲いていたが，とくにハクサンコザ

写真6　天狗の庭より火打山を望む

写真4　噴煙を上げる焼山

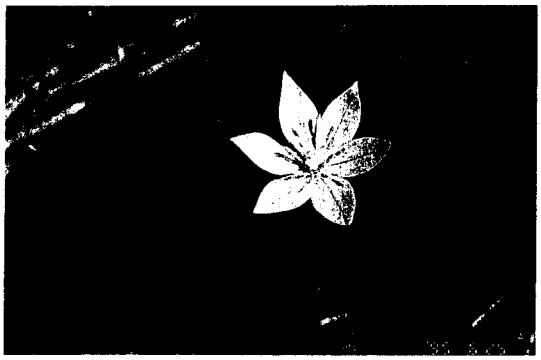


写真7　キヌガサソウ

写真5　火打山頂上で仲間と（右端筆者）

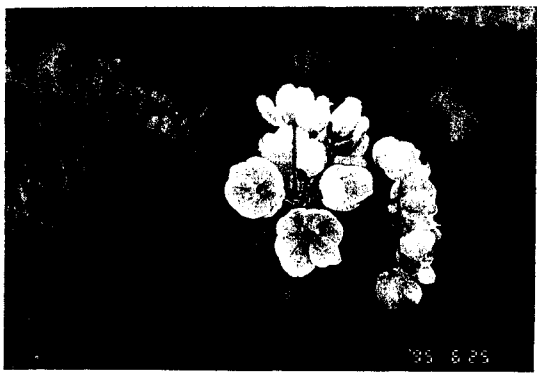


写真8　サンカヨウ

写真9　ハクサンコザクラ

写真10　ショウジョウバカマ

写真11　サクラの一種

クラの清楚な可愛らしい花は初めて見るもので印象深いものであった。

7時火打山山頂に到着。眺望は極めて広大360°の展望。北には日本海が（佐渡島，能登半島），南には北アルプス，富士山（残念ながら見えなかったが）が眺望できる。すぐ隣の焼山（標高約2,400m）が白い噴煙を上げている，その先にあの雨飾山（標高約1,963m）が手にとるように見渡せるのが印象的であった。頂上は適当な広さであり休むに手ごろな転石がある，記念写真など撮り，小休止のあと往路を引き返した。途中桜の一種と思われる小振りの花を一杯に咲かせた木があちこちにあり，目を引いた。

写真12　シラネアオイ（白）

写真13　コイワカガミ

9時半頃高谷池のテント場に戻り，テントを撤収し黒沢池経由で戻り，笹ケ峰に15時半到着。黒沢池ヒュッテ脇に咲いていた白いシラネアオイが印象的だった。

東京への帰路の途中，池の平の温泉でひと汗流し，妙高高原の蕎麦屋で飲食を済ませ長野自動車道，中央高速を経由し23時頃全員無事東京に着いた。

初めての仲間との山行でしたが，10年来の知己のように楽しい山行でした。とくに黒沢の渓流と新緑と残雪と山野草の美味とシラネアオイ（紫と白）とハクサンコザクラ等々の花，花，花と素晴らしい眺望と自然の恵を満喫し，得るところの多い山行でした，今度は是非夏の妙高山や火打山頂上で目前に見た雨飾山にも登ってみたい，まだ体力があればのことですが。

ずいひつ

残雪の春山の憶い出

－前夜宿泊し遭難死した登山者と同じ場所に翌日寝ていた－

三　浦　吉　成*

当「油空圧」に寄稿してきました山行雑記もはや6回目を数えることとなりました。恥も外聞もなく続けていると何となく止め難くなって“継続は力なり”とも言いますしボケ防止のためと思ってまた書くことにしました。でも，最近は記事が書けるような山行とはご無沙汰しているし，過去の山行でもいつも話題があるとは限らないし，むしろ単に行って帰ってくるといったケースの方が多いかも知れません。したがって、今回の話はもう5年前（平成4年）になりますが，大阪に居るとき5月の連休にいつもの仲間と残雪の春山に行ったときのことです。北アルプスにはいつものことですが大阪阪神ホテル前21時30分発の夜行バスで行くと翌朝6時に上高地バスターミナルに着きます。寝ている間に目的地に運んでもらえるから楽です。なにより交通費が安く済むのがありがたい。今回もご多分に洩れずこの手で行きました。確かにバスは良いのですが，眠れる時ばかりではないし，寝不足で翌日の歩きに影響することもあり，若さでカバーできたときは良いがいまではど

写真1　河童橋

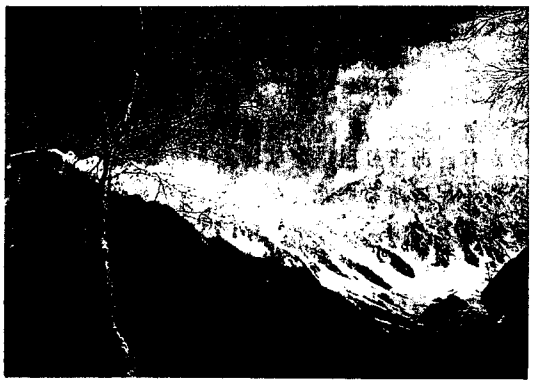


写真2　河童橋からみる穂高の山々

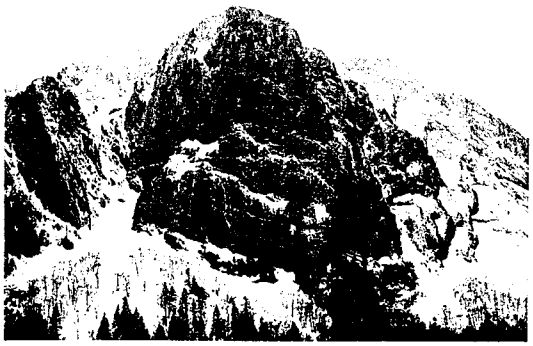
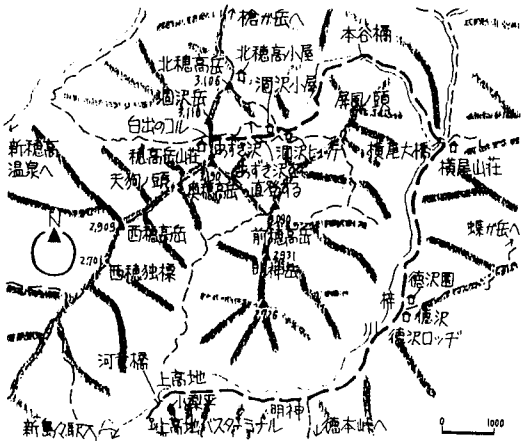


写真3　屏風の頭



*㈳日本油空圧工業会

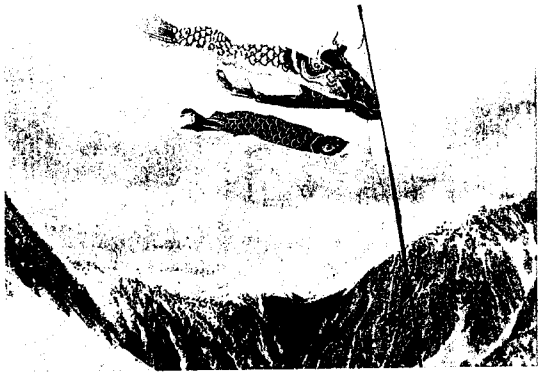


写真4　涸沢ヒュッテに翻る鯉のぼり

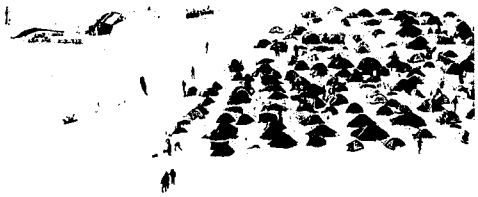


写真5　涸沢カールのテント

うかな，あまり自信がない。それより鼾で他の人を寝不足にする可能性が大きい，そのほうが心配である。さて，春山行きの方はいつもの仲間でパーティは男性3人と女性2人でした。目標は春山のメッカ涸沢～穂高で3泊4日（内バス車中1泊）の行程でした。その冬は雪の多い年で，北アルプスの残雪もたっぷりあり，涸沢ヒュッテは完全に雪に埋もれていました。穂高岳山荘はなおさらです。

4月30日（木）ほぼ時間通り朝6時上高地バスターミナルに着く，このバスターミナルにも食事をする場所はありますが，河童橋（現在橋の架変え工事中）まで行き，上高地では時々利用する橋の前の土産もの店の2階の食堂でトーストとコーヒーの軽い朝食を済ませ出発。上高地は相変わらず山歩き姿の人が多い。とくに河童橋周辺はこれから登る人，帰る人それに一般の観光客が行きかうところでそれなりに混雑をしている。河童橋を出発し，梓川に沿って東に歩をすすめ小梨平，明神，徳沢を過ぎ約3時間程で横尾に着く。横尾からは，横尾大橋を渡ってからは左手にあの“屏風の頭”を眺めながらの緩やかな登りとなる。途中本谷橋を過ぎた頃から雪の上を徐々に登って行くが寝不足の影響がでてきたようだ歩く速度もいささかペースダウン気味，息も切れる。やがて写真で見覚えのあるあの涸沢カールが目前に広がる。感激で今までの疲れが嘘のよう，河童橋をスタートして，6時間以上は歩いているだろう。小屋は雪の中で見えないが涸沢ヒュッテあたりに鯉のぼりが風にはためいて我々を呼んでいるようだ。純白の雪原にカラフルなテント群が鮮やかな色模様を描いていた。今日は涸沢小屋に泊まることにした。この時期泊まり客は思ったより少ないようで布団も比較的ゆったり敷かれていたと思った。

とにかく今日は小屋で夕食までのんびりするこ

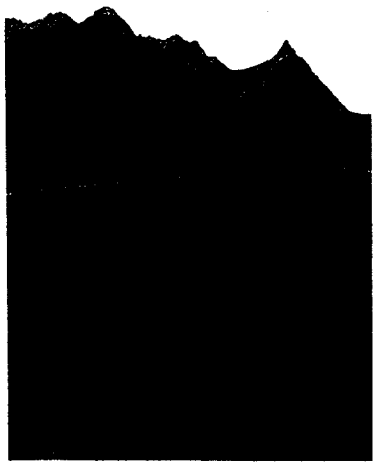


写真6　涸沢カールから見る涸沢槍

写真7　涸沢岳から雲間に見る槍の穂先

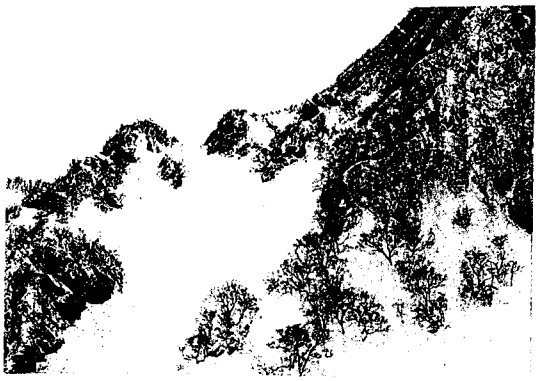


写真8　春を待つダケカンバ

とにし，それぞれ持参の肴などを持ち寄り恒例の宴をひらき時を過ごした。夕食のメニューが何であったかは覚えていない。

翌朝5時頃目覚め窓の外に目をやるとなんと涸沢カールのテント村のテントの数がきのうよりかなり増え，ランダムに描かれた色合いがデザイン的に非常に面白いと感心し，上からの光景をカメラにおさめた。朝食後，小屋に荷物を置いて涸沢岳（3,103M）まで往復することにして出かけた。天気のほうは雲が多くあまり良いとは言えないが悪くはない。雪が深くラッセルが大変，できるだけ踏みあとを登るようにするが膝までもぐってしまい，急斜面の登りはエネルギー消耗が激しい。女性がいるので一応安全のためザイレンし一列縦隊で，小生が先頭を行くことにした。一応みんなピッケルを手にしているがわがパーティの某女性が手にしているのはなんと，雨の日にスナックなどでくれるあのビニール傘ではないか。行きかう他の登山者がそれを見て何となく可笑しがっているように見えた。当のご本人は平気な顔をしてせっせと登っているのがまた可笑しかった。われわれピッケルで登っていることが何となく大袈裟にさえ見えてくる。3.5時間程で穂高岳山荘のある稜線（白出ノコル）に出た。流石にここまで来ると風が強く，冷たい，穂高岳山荘は勿論ゆきの中でした。山荘でたしかなにか暖かいものを飲んだか食べたかしたと思うが覚えていない，一休みして寒風吹荒ぶ（それ程でもないが）中を小生単独で涸沢岳に向かった。春とは言えここまでくるとまだ冬の様相を呈している。風で流れる雲が切れ時々晴れ間は見えるが，もろに風を受ける手や顔が冷たい，足元の岩は氷ついており，風下に向かって海老の尻尾のように雪が付着している。下の山荘で待っている仲間を思いながら，また頂上からの素晴しい展望に期待の胸をはずませながら歩を進め，漸く涸沢岳頂上（3,103M）に着く。ああ，残念！雲で期待した槍ケ岳が見えない。風で雲の切れるのを待つ，時々槍の穂先が雲間に見え隠れする。本来ならば奥穂，前穂，北穂，槍ケ岳が一望できる筈であった。でも，あまり長居はできない，満喫には程遠いがなんとか槍の一部が見えたことに満足し，下ることにした。

穂高山荘で合流し，再び涸沢ヒュッテ目指して雪の中を下る。下りは小生が殿でザイルを確保しながらゆっくり下った。下りは登りと違って陽も射し，風もなく心地よい行程である。上りには気

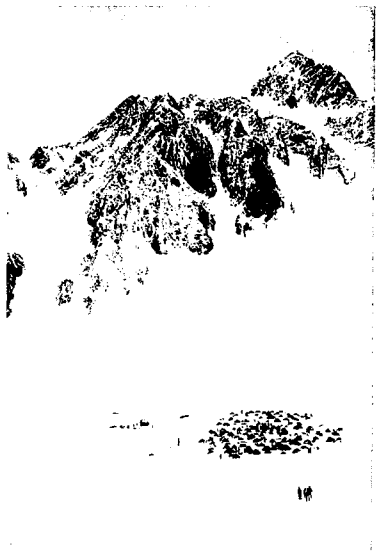


写真9　眼下に見る涸沢カールのテント群

写真10　吊尾根を望む

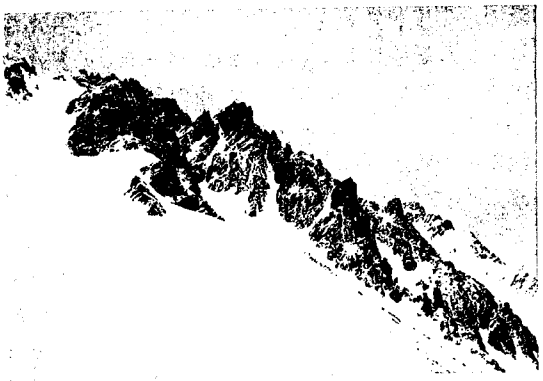


写真11　穂高の岩稜

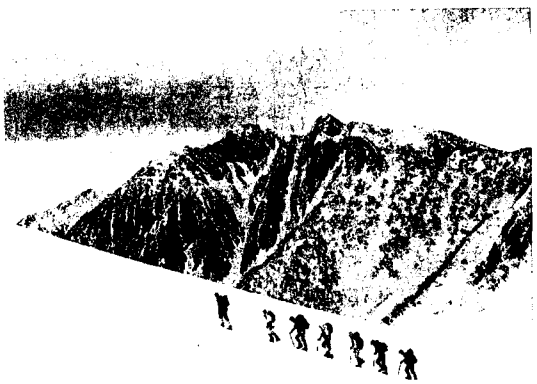


写真12　残雪を行く

付かなかった上から見る涸沢カールの風景，吊尾根やジャンダルムの残雪に包まれた男性的で雄大

写真13　穂高の山々

な姿に目も心も奪われる思いだ，これが山の素晴しいところであり，魅力である。下山途中に気が着いたことであるが，やたら長野県警のヘリコプターが頭上を飛び回っている，遭難者救助に向かっているのだろうと思いながら涸沢小屋に無事戻った。小屋に戻って聞いたことであるが，先程のヘリコプターの謎は解けた。それはわれわれが泊まった日の朝この小屋を出た登山者が北穂付近で遭難（おそらく死亡）しその救助に向かったこと，なんとその人（遭難者）が寝ていた場所に小生がその晩寝たらしいと，なんとも複雑な気持ちである。背後霊に守られながら往路を戻り，上高地小梨平のバンガローで1泊して帰宅した。

雪深い春山のひとつの憶い出でした。こんどは紅葉の涸沢にぜひ来たいと思う。

ずいひつ

訪欧写真紀行（その1）

―― ハノーバーメッセ'97欧州視察団と共に ――

三浦吉成*

この度，図らずもハノーバーメッセ'97欧州視察団にお供してヨーロッパ4カ国を訪問する機会を得ることができました。

日程と訪問先は表に示すように4月1日（木）～26日（土）の10日間で，訪問国としてはドイツ，デンマーク，ベルギーおよびフランスです。

メンバーは平野団長（油研工業）以下添乗員と私を含め総勢21名，工業会視察団としてはかってない参加数とのことです。視察団の目的である工場見学（ダンフォス社，キャタピラー社）および見本市視察（ハノーバーメッセ，パリインターマット）に関する訪問記や感想については別途報告書に譲ることにして，ここでは編集委員会事務局からの依頼もあり，拙い文章はできるだけ省略し，写真を主体にした訪問記としたいと思います。

なにしろはじめての海外は見るもの，聞くものが新鮮で，写真も約900枚程撮りましたが，団体行動の制約から限られた範囲と条件での撮影が多くなったのは仕方のないことでしょう。それでも早朝の自由時間にはできるだけ早起きし（年のせいか幸いいつでも，どこでも目覚めるのは早いのです）ホテルの周りを散歩しながら自分の写真を撮るようにしました。ヨーロッパの風景，家並み，町並みは映画やテレビや絵葉書ではよく見ていますが，なるほど，良く言われるようにどこを取って（撮って）も“絵”になることを肌で感じました。写真紀行文と言っても，記憶力の悪さ，メモを取らなかったなどでどこで何を撮ったものか定かでないものもあり，また文も取留めのないものとなりますがご容赦願いたい。写真を見ていただいて雰囲気だけでも感じ取って頂ければ幸いです。まえがきはこの辺にして本文に入りたいと思いますが，なにを，どこから始めていいものかと戸惑いますが，とにかく日程順に記憶を辿って写真と雑文を記載します。

*㈳日本油空圧工業会

ハノーバメッセ'97欧州視察団日程表

日次	月日（曜）	発着地／滞在地	発着現地時間	交通機関	視察および見学先・宿泊ホテル
1	4月17日（木）	成田発 パリ着 パリ発 ハンブルグ着 ／ドイツ	12：00 17：20 19：50 21：20	AF-275 AF-1508 専用バス	空路，パリ経由ハンブルグへ （ラディソンサスプラザホテル/ハンブルグ）
2	4月18日（金）	ハンブルグ ハノーバー ハンブルグ	終日	列車往復	ハノーバメッセ'97視察 （ラディソンサスプラザホテル/ハンブルグ）
3	4月19日（土）	ハンブルグ ハノーバー ハンブルグ	終日	列車往復	ハノーバメッセ'97視察 （ラディソンサスプラザホテル/ハンブルグ）
4	4月20日（日）	ハンブルグ	終日		自由研修・休養
5	4月21日（月）	ハンブルグ アルス/デンマーク ハンブルグ ハンブルグ発 ブラッセル着 ／ベルギー	5：30 9：00 16：40 17：55	専用バス SN-436	ダンフォス社見学 （9：00～12：15） （シェラトンブラッセルズホテル/ベルギー）
6	4月22日（火）	ブラッセル ゴッセリー ／ベルギー ブラッセル発 パリ着	8：00 17：15 18：10	専用バス AF-2991 専用バス	キャタピラー社見学 （9：30～12：00） （ドゥ・ルーブル・コンコルドホテル/パリ）
7	4月23日（水）	パリ	終日	専用バス	INTERMAT'97 パリ国際土木建設機械見本市視察 （ドゥ・ルーブル・コンコルドホテル/パリ）
8	4月24日（木）	パリ	終日	専用バス	INTERMAT'97 パリ国際土木建設機械見本市視察 （ドゥ・ルーブル・コンコルドホテル/パリ）
9	4月25日（金）	パリ発	10：30	JAL416 （AF-276より変更）	空路，帰国の途へ （機内）
10	4月26日（土）	成田着	9：15		解散

その1－ハンブルグのホテル（ダムトーア駅前）での出来事。それはツアーの初夜に起こりました。事前に外国のホテルにチェックインしたあとは必ず洗面所の水周りのチェックをするように言われていましたので，同室の小関氏（トロコイド）と異常のないことを確認し，私が先に風呂を使いました。後から入る小関氏のため浴槽の残湯

写真1　ハンブルグダムトーア駅（右）とホテル

を捨てようと栓を抜いても一向に残湯は減らず，仕方なく添乗員の杉浦氏に連絡をとり修理に来てもらったが修理不能で隣の部屋へ移ることになりましたが，なんと隣室はダブルベッドのため，部屋に広げたトランクの荷物を片付け，今度は6階から10階へとパジャマ姿での真夜中の大移動となった次第。そう言う訳で床についたのは1時半でした。浴槽の排水までチェックしなかった方が悪かったのでしょうか？一流ホテルでもこんなことがあるのですね，日本では考えられないことでしょう。

その2－同ホテルで感じたこと。洗面所の石鹸，洗髪用シャンプーなどの包装が段ボール紙を使った実にシンプルなもので，無駄なごみをださない，環境問題などの配慮が窺える，この点は日本でも大いに見習うべき点でしょう。

その3－翌朝，食事前にホテルの近くにある公園（植物園やクライネハル庭園などがある）を散歩しました。桜，水仙，パンジーの花が花壇を飾っており，種類は日本も同じである。山菜のこごみが食べごろでした。リスや兎があちこちでエサを食べていたり，自由に走りまわっている光景が見られます。日本ではペット用にされすぐ居なくなるのではと余計な心配が先に立ちます。

また，遊歩道の坂のあるところにはちゃんと勾配を記した標識があり車椅子の歩行に配慮したものと思われます。出勤まえのジョギングや散歩する人を見かけるのは日本も同じですが，ごみ，空缶類のポイ捨てがあまり見あたらないところはちょっと違うようです。

その4－飲み物類の自動販売機がないのにはちょっと困りました。ショップで買う場合でも，瓶入が多く缶類やペットボトル類が少なく，あってもサイズの種類が日本ほど多くないようです。日本のようにあらゆるニーズに対応するようなサービスは見られない，これもリサイクルや環境問題を考慮し，便利さや，利益をある程度犠牲にしている結果と思われます。効率と利益や便利さのみを追及して高度成長を遂げた日本は今シッペ返しを食っている。

その5－車窓から見える町並みや田舎の中の集落がきれいで絵ハガキを見るような風景，なぜだろう。建物の高さと色が統一されていること，電柱やテレビのアンテナが見えないこと，また，洗濯物を外（見えるところに）に干してないこと，それに野立ち広告がほとんど見られない等々，これらが風景を美しく見せている要因であろうが，やはり永い伝統のなせる業で一朝一夕にできたものではないことを感じます。

その6－ハノーバーメッセ会場でのこと。会場は，やはり聞きしに勝る規模で，これを全部回る

写真2　朝の公園のウサギ

写真3　ハノーバメッセ会場　ミュンヘナホール

写真4　ミュンヘナホール楽団席

写真5　同ホールでの一行

写真6　隣席でのんびり一服中のウェイトレス（周りは多忙）

など思っただけでもウンザリする程です。初日，一同は工業会事務局の瀬戸口部長の出迎えを受け，レセプションルームで全体の説明を受けたあと昼となり，瀬戸口部長と通訳の丹生女史のお世話で一同は会場にある，3,000人を収容すると言う噂通り巨大なビアホール“ミュンヘナホール”に案内され昼食？をすることになりました。ホール中央の高いところでは楽団が演奏をしており，なんでもお金を出せばリクエスト曲の指揮ができるとのこと。ビールが非常に美味しく感じられ，何の抵抗もなく私でも大ジョッキ2，3杯は飲めます。昼間のビールにかかわらず不思議に酔わず，午後の会場回りにも支障はない。出てくるソーセージもこれまた巨大だ。みんな腹も，気持ちもすっかり満足し午後の視察に出かけることができました。

その7－同ホールでのこと。ここで働いているウエイトレスたちは，この期間のアルバイトと思われるが，中高年の体格のいい人達ばかり。自分のテリトリーが決まっているのか，隣のエリア（席）がどんなに混雑していても知らん顔して自分のエリア（席）で煙草を吹かしている光景には驚きである。とても日本では見られない光景である。仕事とサービスに対する考え方の常識の違いを感じました。

その8－宿泊地ハンブルグからハノーバーの往復は列車を利用，1日目の往復は1等車で座席指定，向かい合いの6人掛けの座席でゆったりしており，乗心地も広軌のせいかなかなかいい。途中，車掌が検札に来たが，愛嬌たっぷりのなかなかお洒落なおじさんだった。同じ制服でも日本とはどこか違う柔らかさを感じさせるものがある。こちらでは駅の改札が無いかわり，車中の検札で不正が分かると厳しく罰せられるとのこと。合理的とも思えるが日本ではどうかな。列車のトイレもブルーに塗装されこ綺麗な感じでした。2日目，帰りはラーツエン駅から新幹線（ＩＣＥ）に乗りましたが，在来線の軌道を走っていますが，車内は通路を挟んで横3列の座席でゆったりしている。日本に比べ輸送効率は大分悪いが乗心地を重視している結果でしょう。

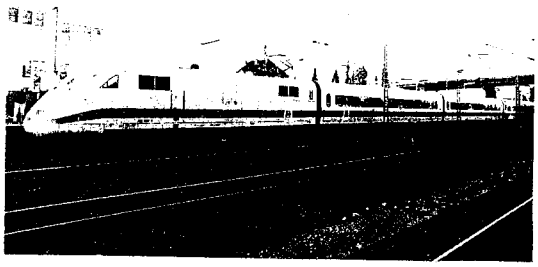


写真7　ドイツの新幹線（ＩＣＥ）

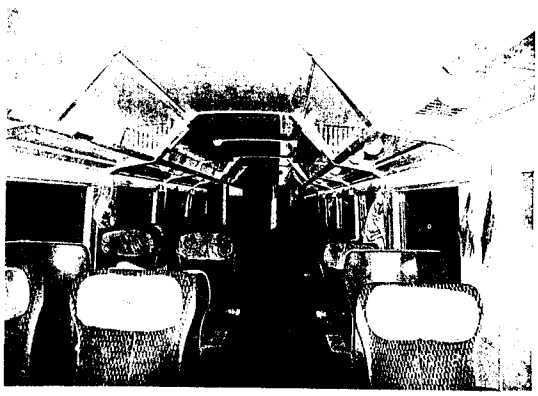


写真8　ゆったりしているＩＣＥ車内

写真9　アルスター湖畔の市庁舎尖塔が多い

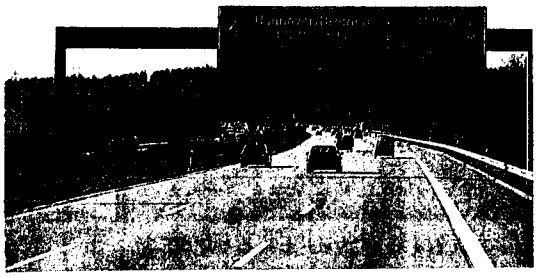


写真11　アウトバーン（ブレーメンへ）

写真10　市街風景　駐車場が無いため路上駐車が全て

その9－ハンブルグでの夕食は1日目はホテルのレストランでトルコ女性の踊りを見ながら，2日目はホテル近くのレストランでビールとワインでイタリヤ料理だった，なかなか美味しかった。確かにビールとワインはどこで飲んでも旨いと感じたのはひとり私のみではないかと思います。

その10－ハンブルグに滞在し3日目が日曜日となり，自由研修？と言うことで，皆さんの希望でブレーメンまでバスツアーに出かけました。ブレーメンはハンブルグからやや南西へ2時間半程アウトバーンを走ったところで，童話“ブレーメンの音楽隊”の舞台で知られる人口58万人の港街，世界史のハンザ同盟の舞台でもあります。落ち着いた雰囲気の美しい街のたたずまいは伝統と童話の故郷を感じさせ，いつまでいても飽きないところです。アウトバーンでは速度制限無しと聞いていましたが，バスはMax. 100km/Hrで，また土日はトラックの通行は禁止とのこと。アウトバーンを疾走するバスの窓からの景色は見渡す限りの土と緑の畑や牧場が続き，所々に森と林が点在しそこには人の住む集落が見られます。

その11－バスの窓から見てこれだけ広大な土地があるのにゴルフ場は全く見られない，ガイドの佐藤さんの話ではドイツではゴルフは年寄りのするスポーツと考えており，若い人は金のかかるゴルフよりサッカーやバスケットに熱中するとのこと。でも，最近ではベルンハルト・ランガーのような世界的なプロゴルファーが出てきたこともあり，一部イッピー族がステイタスシンボルとして始めているとのこと。

その12－ゴルフ場建設には次のような厳しい条

写真12　ブレーメン市章のマンホール蓋

写真13　ブレーメン風景

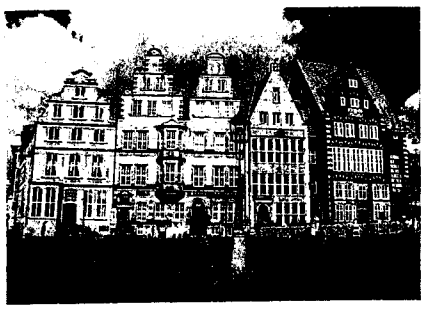


写真14　ブレーメンマークドブラーツ広場

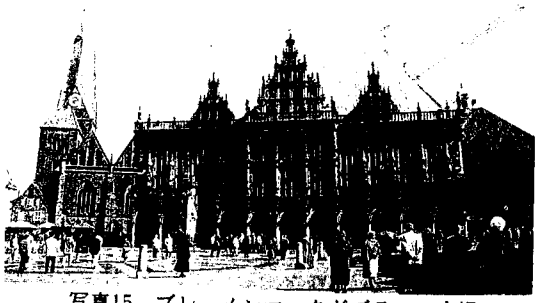


写真15　ブレーメンマークドブラーツ広場

写真18　リーパーバーン“飾り窓”出入口

件があるようです。作物の出来ない土地であること，環境に害の無いことや周囲の住人および動植物に迷惑のかからないことなど。狭い土地でどんどん自然環境を破壊しゴルフ場建設に精を出すどこかの国とはおお違いです。ついでにドイツ人は野球とは何か知らないとのこと。

その13－ブレーメンでの昼食は杉浦さんと通訳の佐藤さんの手配でマークドブラーツ広場にある市庁舎地下の“ラーツワインケラー”でワインとフランス料理を味わいました。その後ハンブルグに戻り，市内と港を観光し，ハンブルグ最後の夜（夕）はレーパーバーンにあるビアホール“HERRNBRAU”でまたまた美味しいビールで名残を惜しんだ。ここではビールの注文の仕方が変っている。グラスの数や量ではなく，長さで注文するのです。と言うのは，客の注文した長さ分だけグラス（小）を細長い板に並べて，ウェイターが持ってくるのです。従って客の数の多いところは相当長いものになります。

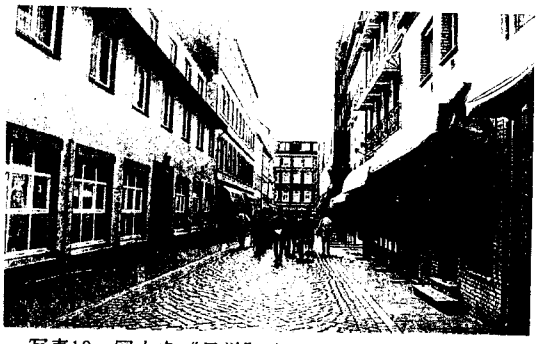


写真19　同上を“見学”するご一行様（撮影禁止）

その前にレーパーバーン（新宿歌舞伎町あたりの感じの歓楽街で－世界で最も罪深いＩマイルと称される歓楽街ですが人形館やオペレッタハウスなど健全な娯楽施設もある－）をまだ陽の高いうちに一回りし，かの有名な“飾り窓”も見学しました。100メートルほどと思いますが，石畳の通りの両側に目の高さより少し高いところに生きた商品？は並んでいましたがあまり食欲の湧くものではなかった。その通りの出入り口は塀で閉ざされており，客は潜り戸から入って行くようになっています。バスの中でガイドの女性から70％はAIDSに罹っているからと言われていたので，若い人も恐れをなし，また，昼間（8時半ごろまで陽が出ている）のことでもあり，酒も入っていないこともあり，みんな見学のみに止まったようです。

以上３日間のハンブルグ滞在において，見たこと，感じたことなど羅列しましたが，さぞ，読まれた人の目を煩わし，時間を無駄にしたことと思いますがお許し願いたい。（その１　完）

写真16　童話「ブレーメンの音楽隊」像

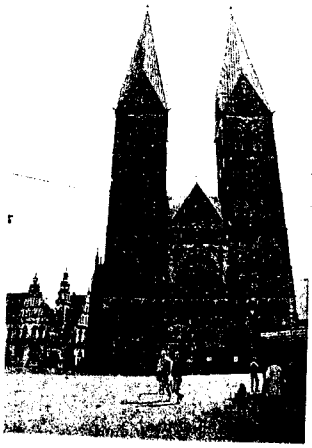


写真17　寺院？